

教職大学院 Newsletter No.170

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2023.04.22(内報版)

伴走する大学院の外周を

福井新聞 みんなの新聞推進室

室長 菊野 昭彦

皆さんが普段、思索にふける場所はどこだろうか？ 私は風呂だ。一番の理由は電話に邪魔されな
いから。終い湯はさらにいい。睡眠時間との交換を覚
悟すれば、家族に気兼ねなく時間は自由に延長でき
るからである。

湯船にひたり、その日の取材を思い起こす。原稿執
筆はその日のうちに終えているので、原稿から省い
た部分や話のポイントを反芻し、翌日以降の取材の
手がかりを探す。「課題をあぶり出すための探究もあ
る」「小中9年間を見通せる教育」「知識ではなく、
学びの姿勢を身に付ける」「見せかけに終わらせない
明確なビジョンが必要」等々、うかがった言葉の奥行
きを測りながら考える。…この話を具体化させると
どうなるのか…以前に聞いた話とつなげてみると…
全体像は…。福井大学連合教職大学院(以下大学院)
の取材をした日は、必ず長風呂になる。高騰するガス
代を大学院に請求する訳にはいかないので、ガス代
に見合うような次を見いだそうと真剣に考える。

× × ×

福井新聞に教育取材を主専門とする「みんなの新
聞推進室」が発足したのは昨年 2022 年の 4 月。室長
に任じられた。私はそれまで教育取材に関わったこ
とはない。まずは地元の教育機関からと、大学院の金
曜カンファレンスにお邪魔したのが昨年 4 月 2 日。
それが大学院取材の始まりだった。外から取材する

のではなくて、実際どんな学びが行われているのか
内側から見せてほしいという厚かましいお願いだっ
たが、拍子抜け過ぎるぐらい簡単に OK をいただい
た。以降、毎週のカンファレンスには記者が必ず取材
に行き、院生の実践と理論の往還の学びを間近に感
じてきた。

大学院主催のラウンドテーブルにも毎回参加させ
てもらっている。勝手に分からず、リモートの画面が
グループディスカッションに割り振られたときは焦
り、マスコミの人間が入ってもいいのかと思ったが
「いろいろな立場の人との交わりは、学びを広げま
すから」との説明で、大学院が取材にオープンな理由
が分かった。中高大学生合同のカンファレンスもあ
り驚いた。資料は紙で保存する習慣を脱しきれない
私の机には、ラウンドテーブルごとにファイルが増
える。狭いスペースをさらに狭くしていく。

教職大学院協会の全国研究大会なども取材させて
もらったし、NIE 全国大会への出席でうちの取材

内容

巻頭言	(1)
スタッフ紹介	(3)
院生自己紹介	(8)
令和5年度開講式	(32)
令和4年度長期実践研究報告作成一覧	(33)
令和5年度年間予定表	(36)
公開研究会 等	(38)

記者がみな宮崎県に向かう中、私一人が東進し、つくば市の教職員支援機構で開かれた大学院が指導する研修会取材したこともある。県内の高校の探究発表会などに取材に行くと、ほぼ必ず大学院の先生にお目にかかりお世話になる。高校の修学旅行に研修の色彩が強くなる昨今は、ディズニーランド並みとは言わないが大学院を行き先の一つに加える高校も増えており、高校の修学旅行を大学院で取材したこともある。

私の自主業務の一つに文部科学省発表資料のチェックがあり、これは難儀であり取り組みたくはないのだが、それでも目をこじ開けて資料を見ていくと、大学院での取材内容と結びつくことが多い。福井大は教員養成の在り方の変革を担う文部科学省の「教員養成フラッグシップ大学」なのだから、当然と言えば当然だ。文科省の資料チェックと大学院での現場取材の繰り返しは「理論と実践の往還」であると私は勝手に命名している。

さらに最近感じるのが、まちづくりを考えるイベントで特に若い世代に関わる催しには大学院が深く関わっていて、現場でお目にかかるケースが格段に増えた。「大学院がハブとなり地域の幸に貢献していく」という研究科長の言葉を思い出す。

そう振り返っていくと、大学院が学内での教師育成にとどまらず、福井県の教育全体の底上げに関わっていることに改めて気づく。いや日本全体、いやエジプトの教師視察団も受け入れていることを思うと、かの国の教育にもだ。さらには福井のまちづくり、幸せづくりにもステージを広げている。紹介しきれない貢献も、もっとあるのだろうと思う。

× × ×

福井新聞で日曜日付教育の見開き紙面「学ぶ考える」をスタートさせたのが2022年5月15日。23年4月23日付までの49回（1月1日付は休載）の紙面を文字数換算すると400字詰め原稿用紙1700枚余。自分が原稿を執筆しない場合もデスクとして全原稿に目を通しているが、長編小説で原稿用紙400枚前後と言われるそうなので、1年間で長編小説4冊分になる。

大学院の先生方の取材は、正直しんどい。専門用語もあり、話が理路整然でムダがなく、ひと言も聞き漏らせないからだ。「それはこういうことですか」というこちらの聞き返しも嫌がらず、丁寧に説明していただけるのでありがたく、かつ気を緩められない。「あれ？聞き流していた、不利益にも考えを巡らせる、の不利益って何のことだったのだろう」とか、夜中に湯船で考える羽目になる。

ある福井大の先生は「難しいことを難しく言うのは簡単。大学の先生も、誰でも簡単に分かるように説明できないとね」となぐさめてくださったが、否、それは伝える新聞の役割だと思っている。作家の井上ひさしさんの「むずかしいことをやさしく やさしいことをふかく ふかいことをおもしろく」の名言は私の目標である。大学院を始めとする福井の教育の動きを分かりやすく紹介することが、子どもたちの伴走者である先生に伴走する大学院の、さらに外側を伴走することになると思っている。周回遅れにならぬよう、今夜も湯船で反芻するのである。



スタッフ紹介



福井大学連合教職大学院 教授 中森 一郎

2023 年 4 月 1 日
付で福井大学連合
教職大学院教授に
就任いたしました。
本大学院の一員と
して日本および世
界の教師教育改革

に力を尽くしていきたいと思っておりますのでどうかよろしくをお願いいたします。

最初に自己紹介させていただきます。1985 年、阪神タイガースが日本一になった年に福井県の教員に採用され、美方高校、若狭高校、若狭東高校で 28 年間教諭として勤務したのち若狭高校定時制教頭、福井県教育委員会高校教育課参事、福井県教育庁課長、若狭高校校長、福井県教育委員会学校教育監を務めました。特にこの 10 年間は管理職を務めてきましたので管理職のリーダーシップの大切さとそれを発揮することの難しさを実感してきました。

今回はそうした自分自身の経験と「AI 分析でわかったトップ 5%リーダーの習慣」(越川慎司 ディスカバー・トゥエンティワン社)という書籍をもとに今年 3 月に県立学校の校長先生、教頭先生にお話ししたリーダーとしての心構えについて紹介したいと思います。

この本ではトップリーダーに共通する資質として次の 2 点を挙げています。

- 1 「聞き上手」で変化に対して柔軟に対応できる
- 2 「共感と共創」を目指す

そしてトップリーダーには以下のような共通する習慣があることが紹介されています。

- ① トップリーダーは伝えるのではなく「伝わる」よ

うに話す。一方的に長く話すのではなく、相手の反応を見ながら端的に簡潔に伝わるように話す。

- ② トップリーダーは仕事の結果よりも「感情の共有」を重視し、相手の話を心と体で聞いてその人の感情に寄り添う。
- ③ トップリーダーはメンバーの能力を生かし高めて目標達成を目指す。そのために雑談や相談し合うフラットな関係を構築し、決してマウントを取ろうとしない。
- ④ トップリーダーは変化に合わせて成長するために常に新しい情報や学びを取り入れ、自分自身の経験や知識にとらわれない。
- ⑤ トップリーダーは偶然の出会いを大切にして「人からチャンスをもたらしている」。そのために多様な人々と積極的に交流しチャンスを引き寄せている。
- ⑥ トップリーダーは相手を承認し、その人のエネルギーを高めるほめ方をする。そのためにちょっとした進捗や成長をほめるとともにネガティブなフィードバックは最小限にして相手の意欲を高めている。

考えてみると、これらのことは教職大学院のカンファレンスやラウンドテーブルで皆さんが実践されていることではないでしょうか。相手に伝わるように話すこと、相手の話にじっくりと耳を傾けその人の感情に寄り添い共感すること、雑談や相談ができるフラットな関係を大切にすること、常に学び続けていること、多様な人々と交流してチャンスを引き寄せていること、互いに認め合い意欲を高めていることなどまさに皆さんが実践し心がけていることではないかと思います。教職大学院での学びを通して

トップリーダーとしての資質能力を身につけることができるのです。

私自身も3年間校長を務めた若狭高校でリーダーシップのあり方を意識して学校経営に取り組んできました。このたび若狭高校での実践をまとめた書籍「異質のものに対する理解と寛容」(中森一郎 シングルカット社)を出版しましたので、もしよければ手に取っていただけますと幸いです。タイトルは若狭高校の教育目標である「異質のものに対する理解と寛容の精神を養い教養豊かな社会人の育成を目指す」から使わせていただきました。

内容は2019年から2021年にかけての学校改革と新型コロナウイルスによる臨時休業時や制限の多い教育活動のもとで先生方がいかに生徒、保護者を支援してきたのか、また生徒たちがいかにAgencyを発揮してきたのかについての考察と学期ごとの校長講話などで構成しています。

コロナ禍という未曾有の事態により危機的な状況に置かれた学校を先生方がどのように支えてきたのかということを若狭高校の取り組みを通して後世に伝えていくことが大切であると考えました。その意味で拙著はまさに教職大学院が大切にしている「実践と省察の記録」でもあります。

奇しくも今シーズン、阪神タイガースは開幕ダッシュに成功し38年ぶりの日本一に向けて幸先の良いスタートを切りました。

これからの日本の教育を支えるリーダーである先生方とともに教職大学院で学んでいけることを楽しみにしています。



福井大学連合教職大学院 准教授 山浦 光雄

皆様はじめまして。
長野県より参りました、
山浦と申します。教職
大学院のスタッフとして
お世話になります。
よろしくお願いいたします

ます。長野県で小学校の教員を15年、その後中学校の教員を3年、そして教育事務所で社会科の指導主事を4年間務めさせていただき、縁あってここ福井大学で勤務させていただくこととなりました。

私が教師を目指すようになったきっかけと、教師としての転換点を書かせていただき、自己紹介に代えさせていただきたいと思います。大学時代、私が教師を目指すきっかけとなった大きな出来事が2つありました。1つは、ボランティアでネパールに行き、2か月暮らしたことです。日本人が建てた山の中の学校がうまく運営されているか見に行く仕事をしました。村の人々と交流する中で、自分の中のこれまで

の当たり前が大きくひっくり返っていきました。自分はネパールに行く前、どこかで「日本の方が豊かな国、日本の方が進んでいる国」と思っていました。しかし、村の人たちみんなが仲良しで、穏やかで、異国の私たちにもとても親切にしてくれるネパールの人々の優しさにふれたり、物がそんなにたくさんなくても、ゆったり、幸せそうに暮らすネパールの人たちの生活にふれる中で、「本当の幸せって何だろう」「本当に豊かってどういうことだろう」「よい教育って何だろう」「人間は、どんな世の中をめざしたらいいのだろう」といった問いが、自分の中に生まれてきました。そして、こういう根本的なことを、未来ある子どもたちと考えたいと考えるようになりました。

もう1つの出来事は、横浜の寿町にあった、「寿識字学校」に週1回、半年間通ったことです。毎週金曜の夜、誰が来てもいい、途中で出ていってもいい、自由な学校でした。在日韓国人のおばさん、今日泊まる所がないという日雇い労働者のおじさん、文字が書

けるようになりたいと通ってきているブラジル人の青年、人生に悩む大学生など、集まる人は毎回多種多様でした。そこに集った人たちが、思い思いに、その時自分の中にあるものを文章にし、読み合い、聴き合う場でした。自分はいつの間にか父の事、母の事、祖母のことなど、自分のねっことなっている人たちについて綴るようになり、綴ることを通して、自分の足場を確かめることができました。この寿識字学校で、ありのままに、正直に、自分をひらいて他者と語り合うことの大切さ、「書く」ことの力、可能性を学びました。こんな思いや学びを携えて、私は教師になりました。

教師としての大きな転機は、4校目に勤務することになった、信州大学附属長野小学校での日々でした。淀川茂重の「子どもの内から」の思想のもと育てられた、4年生の子どもたちとの出会い。自分の思うように「させよう」とする私の教師としての在り方は、子どもたちに通用しませんでした。「先生の授業はおもしろくない」「なんで教科書を使うの？」子どもたちに問いかけられました。「この子たちが本当に望ん

でいることは何だろう」「この子たちが夢中になるような授業はどんな授業だろう」日々自身の授業を振り返り、子どもの心の内側を探る日々が始まりました。この日々を通して、「子ども、相手の側に立つことの大切さ」「子どもの発想の豊かさ、深さ、可能性」を学んだ3年間でした。

今年2月、初めて参加させていただいた福井大学のラウンドテーブルで、同じグループの先生方と、お互いが持ち寄った記録をもとに、膝を交えて語り合ったあの時間は、非常に心地よく、深く感じ、考えさせられる時間でした。「物事の根本まで掘り下げて考える」ことがあのネパールの日々に、「綴り、語り合うこと」があの寿識字学校での時間に、「相手の側に立って、じっくり聴き合う」会の在り方が、あの附属長野小での日々につながっているような気がして、運命的な縁を感じ、胸が震えました。これから出会わせていただく学生の皆さん、先生方と、共に綴り、共に語り合いながら、お互いの足場を確かめるような日々を創っていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。



4月から非常勤講師として勤務させていただくことになりました向当と申します。この3月までの38年間、福井県内

で教員や行政職として、学校教育に携わる仕事をしてきました。

実は、このニュースレターに教職大学院のスタッフとして自己紹介文を書くのは2回目になります。1回目は、福井大学附属中学校（現在の後期課程）で7年目を迎えた年から2年間、スタッフとして教職大学院に関わることになり、2008.6.6発行No.4のニュースレターに寄稿し、スタッフとしての抱負と私のそれまでの教員生活の振り返りを書かせていただ

非常勤講師 向当 誠隆

きました。その原稿を読み返してみると、『分相应』『温故知新』『大同小異』という言葉が出てきていました。それらは、23年目の教員としてこれまでの経験から感じていた言葉ではありましたが、それ以降もずっと大事にしてきた思いであり、その原稿を読んで感慨深くなりました。

附属中に7年間勤務した後は、福井県教育委員会義務教育課に5年、学校教育政策課に1年の6年間、教育行政に関わる仕事をしました。この期間は、学校現場と大きく異なる、まさに違う職業に就いたともいえる6年間でした。そこで学んだことは、教育は学校現場だけではなく、様々な機関、多様な立場の方々によって大きな枠組みの中で動いていて、その一つ一つ、一人一人が実に組織的に機能しているという

ことでした。と同時に、教師という職業のよさを改めて強く実感したことも事実です。

また、それまでは高校の先生や県庁職員の方々と一緒に仕事をする機会はなかったのですが、義務教育課では高校教育課の先生方をはじめ、さまざまな業種の方と連携する仕事が多くありました。また、学校教育政策課は行政職員や高校の先生、鳥取県からの派遣教員も所属する組織でした。それまで小学校と中学校での勤務しかない私は、今思えば視野の狭い考えしかなく、課のリーダーともしばしば意見を対立させることがありました。それでも課全体で大きな仕事を成し遂げた経験を通して、自分自身にとってかけがえのない同僚を得るとともに、協働することのすばらしさを味わうことができました。行政勤務で関わった方とは、それからずっと公私ともにつながっていて、かけがえのない財産になっています。

行政勤務後は、中学校教頭3年、小学校校長3年、中学校校長2年の8年間、公立学校の管理職を務めました。とはいえ、自分の果たした役割を振り返ってみると、強いリーダーシップを発揮して学校改革を推進するような管理職ではなかったと反省しています。それでも、常に心がけていたことは、教員にとって居心地のよい学校、働きがいのある学校になるように努めたことです。それが子どもたちにとっても居心地のよい学校、学びがいのある学校につながると信じていたからです。

最後に、教員を退職した今、私が多くの人に伝えていかなければならないと思っていることがあります。

それは、『教師冥利』ということです。それを強く思うきっかけとなったのは、およそ1年前、同じ学校の教頭先生から、初めて担任した教え子が料理長をしているのでその店に是非行ってほしいと招待を受けたときのことでした。その教え子は教頭先生と過ごした時間を実に鮮明に覚えており、今でもすごく感謝していること、管理職になったお祝いを同級生で計画していることなどを聞いているうちに、これこそ教師冥利に尽きると思い、すごく感動したのです。この話は、そのあとすぐに教頭先生だけでなく学校の先生方にも伝えましたし、福井市の校長会の挨拶でも話をしました。また、県中学校長会の広報誌にも書きました。

それだけこのエピソードを多くの方に紹介したのは、昨今の教師という職業に対するマイナスイメージのニュースに対して心を痛めていたということがあり、自分ができることは『教師冥利』をより多くの人に伝えていくことだと思ったからです。そして、教師という職業にやりがいと誇りをもつ、そのことこそ、仕事に対する次なる情熱を生むのではないかと考えています。

この「教師」という言葉には管理職も含まれていると思っています。私自身の『教師冥利』を含め、これまでの経験を教職大学院での仕事に生かしていけたらと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

非常勤講師 大正 秀哉



今年度より、教職大学院の非常勤講師としてお世話になります大正秀哉です。

3年前に小学校の校長を退職し、2年前は中

学校で数学の授業を担当、昨年度は週3日小学校で採用2年目の先生の授業の支援を行ってきました。専門教科は数学です。

今年度は、他の職との兼務になりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

教職大学院のスタッフとしてお世話になるのは初めてですが、平成20年度から附属中学校に勤務した際には、教職大学院の先生方にはいろいろとご支援をいただきました。

そして、今になって思い返すとその附属中学校での7年間の勤務で、担任、学年主任、教務主任、主幹教諭、教頭の職を通して、自分の授業観や生徒指導、学級経営の転換点となり、さらには以後の学校経営のイメージをつくり上げるものになりました。

当時、教職大学院ストレートマスター1期生の数学科2名と一緒に、附属中学校で授業を始めることになり、衝撃と戸惑いの1年間（7年間？）でした。

例えば、授業では子供の思考過程をできるだけ残して以後の学びに繋げる、授業の途中で先生が話し始めることで子供同士の対話や思考を極力途切れさせない、授業の最後に先生が内容をまとめることは我慢して子供の発言を活かして終わるなど、それまでの自分の授業観とは大きく違った感覚で授業をしようとする中で、自分自身にとって新しい発見があり楽しさを感じていたように思います。

また、カリキュラムも、教科書にとらわれず単元全体や複数の単元を融合させてテーマを設定し、課題をつくることの面白さも少し感じながら、子供たちと授業をつくっていたように感じます。

最後の2年間は教頭としての勤務でしたが、研究とは少し違う学校経営の側面から、先生方の強みを活かして、先を見通した言葉かけをすることでマネジメントしようとしていたように思います。また、一方では、研究・探究と生徒指導、主体性と規律など、転任された先生方の以前の勤務校における教職経験からは、一見相反するようにみえる葛藤に近い悩み

をもつことがある中、各先生方が自信をもってやりたいことができるような環境づくりを意識していたように思います。

途中、楽しく感動することも本当に多くあった反面、悲しくつらい事もいくつかありましたが、担任の先生や管理職の先生方とともに、チームとなることによって乗り越えてこられた気がします。

最後の勤務校になった小学校では、校長として特別支援教育の大切さを感じ、支援の方策に大きな関心が生まれました。ノーマライゼーションの考え方の浸透の必要性とともに、これからの学校にとって、さらに重要度が増す内容であると感じます。

支援の方策は十人十色で、まずは子供に寄り添うことから始まり、保護者やいろいろな関係機関・施設等も巻き込みながら方策を探っていく中で、自分も沢山のことを学ばせてもらいました。しかしながら、自分の中で未だ課題は多く残っていると感じます。

昨年度、他大学の2つの教職大学院の実施状況について学ばせていただきましたが、本学教職大学院では、拠点校方式という大きな特色を持ちながら、こうした特別支援教育に関する学びもしっかりと保障されています。自分とは違う考え・思考の友達とのコミュニティの形成とともに、これからの学校・教室の中では、学校として・担任として・子供たち同士として、配慮を要する子供たちとの関わり方を学び、コミュニティを形成することを通して、周囲の子供たちの成長に繋げることの意義を実感することが大切であると感じています。

これから、先生方や院生の方々とともに学ぶつもりで参加させていただく気持ちですので、どうかよろしく願いいたします。



院生自己紹介

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立高志高等学校

笈田 峻汰 (おいだ りょうた)

はじめまして。今年度より授業研究・教職専門性開発コースに入学しました笈田峻汰です。昨年度までは、福井大学教育学部中等教育コースに所属しておりました。取得免許は、小学校一種、中学校一種（数学）、高等学校一種（数学）です。

私は小学校のころから教師を目指してきました。数学の教師を目指し始めたきっかけは中学校2年生のときの数学の先生でした。その先生はよく「数学を数楽に」ということを仰っていました。数学の授業では、教科書はほとんど使わず、楽しい授業だったことを覚えています。さらに高校の担任は3年間同じで、数学の専門でした。その担任の先生は授業では反転学習を取り入れるなどの工夫をしていました。さらに進路指導では思うように点数が伸びず志望校で悩んでいる私に具体的なアドバイスをしてくれました。また、部活動での悩みや不安にも寄り添ってもらいました。楽しくもあり学びも深まる授業をしていた数学の先生、授業以外でも様々なかたちで生徒に向き合っていた担任の先生の2人の姿が私の目指す理想の教師像になっています。

学部では学問数学や数学教育について学び、その中でも特に大学2年生のときに学んだ関数解析学の分野に興味を持ちました。学んでいく中で当たり前のことにこそ疑問を持つことの大切さに気づきかけになりました。例えば、加法や乗法を平面・空間に関係なく同じ方法で計算ができることに疑問を持たないと思います。もし生徒からなぜ同じ方法でできるか聞かれたときに答えられるでしょうか。これに限らず、私たちは当たり前だと思っていることに対する生徒の疑問を「それがルールだから」で終わら

せるのはもったいないことだと思います。疑問は学びのスタートだといえます。主免教育実習では疑問が出てきていることは分かるのに思うように授業に反映しきれないこともありましたが、新しい気づきや疑問を見つける姿を見ることができました。自分も気づかなかった視点もあり、生徒と一緒に成長しているのを感じました。生徒の自ら学ぶ意欲を引き出すことや自分たちで考えて課題を解決しようとする力を伸ばしていきたいと感じ、教師になりたいとさらに強く思うようになりました。

大学院への進学は大学2年生のときから考えていました。ただ、教職大学院か高度な数学の専門性を学ぶことのできる大学院か迷っていました。学部の4年間で私は教職よりも数学の専門性を高めることに重点を置いてきていたこともあり、学部卒業と同時に学校現場に出て、自分の思い描く授業ができるか考えたときに教職の専門性が足りていないと感じ、教職大学院への進学を決めました。

大学院では、インターンシップの中で生徒との長期的な関わり、生徒が自ら学んでいく意欲をもつことのできる授業や数学の系統性を感じることができると授業について考えていきたいです。理論を基に経験と組み合わせるより教師としての力量を高めていきたいです。また、学部で特に力を入れてきた関数解析学での学びを生かし、関数指導についての実践やカリキュラム研究もおこなってきたいです。

教育実習のときには経験できなかった新たな学びが得られると思うととても楽しみです。楽しみを感じると同時に様々なことが初めてで不安なこともあります。大学院の先生方、配属校先の先生方と生徒、

他の院生から多くのことを学び、自分の武器となるものを探していきたいと思います。2年間よろしくお願いいたします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/岐阜聖徳学園大学附属小学校

帯川 夏穂 (おびかわ かのん)

初めまして。福井大学連合教職大学院 授業研究・教職専門性開発コースに入学いたしました、帯川夏穂と申します。

昨年3月まで岐阜聖徳学園大学教育学部 音楽専修に所属し、ピアノを専攻していました。現在、小学校一種、中学校一種（音楽）、高等学校一種（音楽）の教員免許を取得しています。

出身は長野県です。幼い頃からさまざまな分野において興味があり、疑問に思ったことについて図鑑や本を読んだりインターネットで調べたりすることが好きでした。その中でも最も興味を持った分野が音楽でした。さまざまなジャンルの音楽を分析したり、5歳から約10年間ピアノを習ったり、中学・高校生の頃は吹奏楽部に所属し、自分や仲間と向き合いながら音楽を完成させていくことがとても楽しいと感じながら過ごしてきました。

そして次は私が、音楽の楽しさ、おもしろさを伝え、誰もがそれらを感じられる環境を作り上げられる先生になってみたいという思いから、教育学部に進むことを決めました。

大学時代では音楽・教育以外ではよさこいサークルに4年間参加し、踊りという形でたくさんの仲間と関わりながら作品を作りました。また、「レクリエーション研究会」というサークルにも所属し、小・中学生と一緒にレクをしたり、レクリエーションの指導法や、子どもとの関わり方をより実践的に学びました。

教職大学院へ進学しようと決意したのは3つの理由があります。

1つ目は音楽に対して「嫌い」「苦手」というネガティブな気持ちのある子どもの理解とそれらを改善する教師のあり方を知りたいということです。教育実習で研究授業をした際に「音楽の授業は好きですか」という授業アンケートを行った際、約4割程度の子どもが「嫌い」と答えており、指導書通りの指導では通用しないのではないかと疑問を持ちました。そこで私自身が音楽を苦手とする人からみる楽しさ・おもしろさとは何かが分からないことに気づき、それらは他教科も同じではないのかと疑問が広がり、更なる研究の機会と時間を求めるようになりました。

2つ目は子どもが「表現させられる」授業ではなく、「表現する」授業ができる教師とはどのようなものか知りたい、私自身なりたいたいという思いからです。大学4年生の時に、前述の1つ目に紹介させて頂いた内容を解決したいと思い、音楽教育を研究するゼミに何度か参加しました。その際に「省察的实践」というドナルド・ショーン氏の考え方と、それを実践する福井大学連合教職大学院の「協働学習」に出会いました。それらは子どもの表現を引き出せる教師としての資質を手に入れられるのではないかと可能性を感じ、興味を持ちました。大学院では省察的实践力を磨きつつ、子どもの表現を引き出すことのできる教師を目指し続ける基礎を固めたいです。

3つ目は、私が教育者になったら子どもたちに「学び続ける人間」として成長してほしいと願っているからです。どの子にも公平にそれらを伝えるためには、様々な発達段階や特性の子どもの存在やそれぞれに適切な指導方法について、自分自身が学び続けることが大切だと思います。長期インターシップを通して、教育実習では学びきれない、様々な子どもの

様々な成長過程ごとの向き合い方を学び深めたいと考えています。

大学4年間では教育について勉強をしてきたつもりでしたが、振り返るとコロナや環境によって学びの機会が思うように得られなかったことや、私自身の学習意欲の甘さから、研究といった領域まで到達できなかったと感じており、大きな後悔があります。

教職大学院での2年間では実りのある結果や知見を得て、自信を持って教育現場に立てるよう、一日一日の積み重ねを今まで以上に大切にしながら研究に励みます。

これから関わる方々、インターンや大学の先生方、お力添えいただけると幸いです。2年間どうぞよろしく願いいたします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

金田 潤之介 (かねだ じゅんのすけ)

初めまして。今年度から授業研究・教職専門性開発コースに入学しました金田潤之介と申します。昨年度までは、福井大学教育学部中等教育コース芸術・スポーツ教育サブコース(音楽)に所属しておりました。取得免許は、小学校一種、中学校一種(音楽)、高等学校一種(音楽)、特別支援一種です。

私は幼少期からピアノを習い、中学校や高校では合唱をして様々な曲を演奏してきました。コンクールにも入賞し、自分の特技として紹介できるまでになりました。しかし、大学に入り、共に入学してきた同期達と音楽の話をしてみるとそれぞれが経験と知識に裏打ちされた持論を持っており、自分は上手く言語化することが出来ず自分がこれまでいかに受動的な音楽活動をしてきたのかを痛感しました。教師として子供達と関わっていく中では自分の考えを言語化し、伝わるようにしなくてはなりません。そのため、学部ではピアノを専攻し、メロディーの出し方や表現についての演奏方法を学び少しではありますが、知識や経験を基に「音楽性のある演奏をするために気を付けるべきこと」に対して自分なりの意見を話せるようになりました。

私が教員になりたいと強く考えるきっかけになったのは、教育実習で子どもの姿と成長に触れたからです。中学校の教育実習ではどのように関わっていけば良いのかわからない私に対して子供達の方から

関わろうとしてくれました。私のわかりづらい問いかけに対しても何とか応えようと考えてくれました。小学校の教育実習では、ある児童が問題に対して変な理論の元拒否をしていました。担任の先生はその子に対してその子の考えに沿って話をして解決をしていました。その子は納得したのかその後は問題に気を付けるようになりました。特別支援学校では、子供一人一人に合った支援を展開する中で障がいをもつ故の辛さや苦悩に触れました。実習生だからこそできる関りがあるのではないかと感じてその子と接していくとその子も次第に心を開いてきてくれました。この3つの実習を通して私は「児童・生徒たちが身心共に成長できるように手助けしたい」という気持ちが芽生え、教員となり子供達と長期的に関りたいと考えるようになりました。

大学院では、インターンシップの中で生徒の心や考え方の変化を深く観察して生徒達と関わり、様々な挑戦や失敗を繰り返していく中で教師としてのスキルアップを目指していきたいと考えています。自分の専科である音楽はピアノの表現や技術的な面をより一層磨き子供達に良い音を聞かせるように努力すると共に、子供達の成長を促すことのできる音楽の授業を追究していきたいと考えています。

最後になりますが、周りの先輩方や先生方から刺激を受け自分の引き出しを増やし頑張っていきたい

と考えていますので週間・月間カンファレンス、ラウンドテーブルでご指導宜しくお願い致します。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立高志高等学校

川嶋 海音 (かわしま みお)

はじめまして、この度福井大学連合教職開発研究科教職開発専攻の授業研究・教職専門性開発コースに入学いたしました、川嶋海音と申します。昨年度までは広島大学工学部で応用化学を専攻しておりました。大学では教員免許を取得できない学部在籍していたため、大学院で免許取得プログラムを通して中高の数学の免許を取得する予定です。

私は高校生までは教員を志しておりましたが、大学受験生当時、「教員はブラックだ」などメディアが大々的に取り上げていた時期であり、就職がしやすいという安易な考えで工学部に入学しました。そして大学では、家庭教師のアルバイトをすることになり勉強が苦手な生徒や学校でのいじめを受けている生徒を担当しました。その中で、子供達の成長やゆっくりとですが、私に心を開いていく姿を通して教師になりたいという気持ちが再燃いたしました。その中でも一番印象に残っている生徒がいます。その子は、学校に行けない生徒で最後まで私に心を開いてくれる様子はないまま、その子の指導を離れました。4年前のことですが、まだその子にどう接したらよかったのか、私が教育についてもっと豊富な知識をもっていれば…など、後悔が残っております。そして、教師になりたいという気持ちが膨らんでいく一方で大学での勉強に興味がわかなくなっていき、最終的には大学に行けなくなってしまいました。休学や復学を繰り返しながら、学校のサポート、地域の人などに関わり徐々に大学へ行くことができるようになり、6年間かけて卒業いたしました。この学校に行けないという経験は、同じように学校に行けなく苦しんでいる子供達の気持ちを理解できる貴重な期間だったのではないかと、今では感じています。

また、大学時代は化学を専攻していましたが、取得免許は数学を希望しております。私自身、高校生当時数学が一番好きで、得意な科目でした。大学で研究室に入り、数学の教師になりたいと指導教員に伝えたところ、配慮していただき化学とは名ばかりの、数学を用いた卒業研究を与えていただきました。そこで、道具として使う数学を学び、化学、物理などの理系科目は、数学が基盤となっていることを深く痛感しました。高校までの数学は苦手意識がある子も多く、理系を選ぶ子も少ないと思います。また、今では少しは多くなっていますが、文理選択で理系を選ぶ女子生徒は少なく、工学部にいたっては、女性はとても稀有な存在です。工学部卒の女の私が教員を目指すということも珍しいと思いますし、多様性が重んじられる今の時代、工学部を卒業しているからこそ、教師という立場になったら子供達に何か他の教師とは違う特別なことを与えられるのではないかと考えております。

私自身、教育学を学ぶのはスタートを切ったばかりであり教職大学院では、「主体的・対話的で深い学び」を元に、教職員の先生や大学院の先輩、同級生、あらゆる人の取り組みや考えを聞いて自分の中に取り込もうと考えております。今までに数回、カンファレンスに参加いたしましたが、毎度違う人たちの話を聞いて刺激的な経験になっていると実感しています。毎週のカンファレンスでは他の方と対話することを通して、自分の考えが毎回アップデートされ、たくさんの気づきが発見できます。

インターンでは、インターン校の先生を観察して学校という社会の仕組みを学び、生徒との関係性を築いていきたいです。また、学校という環境に慣れて

きたら、そこにある課題を見つけいい方向に繋がるよう取り組んでいきたいと考えています。教育については皆さんと比べると知識も経験も乏しいですが、

これからたくさんの方の事を吸収していこうと思っております。これから3年間よろしくお願いいたします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立丸岡高等学校

黒瀬 玲凱 (くろせ りょうが)

今年度より福井大学連合教職大学院授業研究・教職開発専門性コースに入学しました黒瀬玲凱です。将来は福井県の公立中学校・高等学校で理科教員として働きたいと考えています。

私は勝山生まれ勝山育ちの地元っ子で高校は「自転車通学がしたい」という理由で勝山高校に進学しました。高校進学当初は「地元進学がしたい」と福井大学教育学部への進学を考えていましたが、当時の担任の先生の勧めもあり、地元以外の世界を知ること、自身の限界を知ることなどを目的とし、京都大学理学部に進学し、昨年度無事卒業し、中学校教諭一種免許状(理科)と高等学校教諭一種免許状(理科)を取得することができました。

理科についてももう少し詳しく話すと、高校時代は物理と化学を選択して学びましたが、大学では地学(地質鉱物学)を専攻しました。大学からいきなり地学の道に進んだ理由としては、そもそも小学生の頃から恐竜やジオパークといったものに触れ、地学に対してそれなりに興味があったこと、物理と化学は高校時代にそれなりに学び、さらに専攻していないものの大学基礎レベルは講義を受けたため、それらを深めるよりも、全く知らない地学の世界をもっと知りたいと思ったこと、そして、地学を学ぶ中で岩石や気象といった特別な道具がなくとも、特別な技術がなくとも観察することができるものについて知ること、今まで見えていたものが全く違うものに見えるという感動を覚えたことが挙げられます。福井県では地学を教えている高校は少なく、教育実習の

際も化学と物理で行わせていただきましたが、このような経験を活かして化学も物理も地学もできる理科教員を目指しています。

このようななかなか類を見ない経歴をたどった原因の一つとして、私が非常に好奇心の強い人間であったことがあると考えています。幼いころから不思議なことに会った時の感動、あるいは新しいことを知った時の感動に魅入られた私にとって学校での勉強は非常に楽しいものでした。特に理科の授業は自分が知っている現象の、自分が知らなかった原因を知り、世界の見え方が変わった感動、あるいは今まで見たこともない現象を実験で見て、新しい世界を知った感動を私に与えてくれました。この感動を追い求めて、好奇心に従って活動した結果、私は京大に進学し、物理と化学では飽き足らず地学を専攻し、さらにこの感動を次の世代にも知ってもらうべく、理科教員という道を選択するに至っています。

私が教師を志した理由には好奇心以外の私の側面も寄与しています。それは「自分の視界にいる人の『やりたい』を叶えたい」という考えです。私はこれを人生の目標としています。大学では、自分の学業を疎かにしないという事で、サークル(吹奏楽団)に所属し、幹部職と演奏会内の有志ステージのチーフを兼任し、アルバイトの塾講師では他のアルバイトの先生方の3倍出勤したうえで、自分の勤務時間が終わった後でも生徒からの質問があれば対応していました。つまり、団員の演奏会を成功させたい、あるいはこんなステージを作りたいという思い、塾の生徒のもっと

わかるようになりたいという思い、そういった「やりたい」を叶えるために尽力し、中には実際にかなえられたものも多くありました。周囲の全員から「働きすぎ」と評されるほどに尽力してしまうところは私の利点であり、欠点でもあると思っていますが、幸か不幸かそれだけの業務をこなすだけの能力と耐久力を持ち合わせており、今のところ限界は経験していません。

ただし、私は「自分の視界にいる人」を助けることで手いっぱいです。かつては本当に「みんなの『やりたい』を叶えたい」と考え、1人の人間ができることの小ささに挫折したこともあります。そんな私が社会に最も貢献できる職業が教師であると考えています。教師の目の前にはたくさんの『やりたい』を抱えた生徒がおり、「自分の視界にいる人」が多い職業だ

と考えています。さらに、生徒らの『やりたい』を叶えることで、その生徒が誰かの助けとなり、結果として、「自分の視界にいる人」ではない、多くの場所で、自分よりも後の世代まで誰かの助けになることができます。つまり、教師は「自分の視界にいる人」を助けるだけで最も多くの人を助けることができる職業だと考えています。

理屈を述べることは簡単ですが、「生徒全員の『やりたい』を叶える」ことが難しいことは理解しています。さらに、学校現場には保護者・教師・学校・地域社会などの『やりたい』が複雑に絡み合っており、その難易度を高めています。そのような難しい現場で、自分の能力をどう活かしていくことができるのかをこの連合教職大学院での実践の中で学んでいきたいと考えています。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

桑原 里沙 (くわばら りさ)

はじめまして。この度、福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コースに入学しました桑原里沙です。昨年度までは、富山国際大学の子ども育成学部にも所属し、小学校一種の教員免許を取得しました。今年度から3年間、免許取得プログラムで中学校一種(社会)と高等学校一種(地理歴史)の教員免許を取得します。大学に通っている間に、小学校でも教科担任制を取り入れられることを知り、中学校や高校の免許も取得したいと考えました。そこで私は、ふるさと教育を大切にしたいと考えていたことから、中学校一種(社会)と高等学校(地理歴史)を取得しようと決めました。

私は、大学で「主体的・対話的で深い学び」に注目した各教科の教育法や教養科目を学ぶことができました。児童主体の授業を目指し、日本でどのような取り組みをしているのか知ることができました。大学3年

生でゼミに入り、「対話的」に焦点を当て、グループ活動について研究してきました。クラスで発表することが苦手な児童がそれを克服したり、授業での対話を増加させたりするには、どのような活動を取り入れることが良いのかを研究しました。新型コロナウイルスの影響で、近年はグループ活動を活発に行うことが難しかったのではないかと感じます。私が大学3年生のときに母校の小学校で行った教育実習でグループ活動を行うことができず、給食も全員前を向いて食べる環境でした。そんな児童に、グループ活動を取り入れた授業で対話をする楽しさを実感してもらいつつ、自己の考えを深めてほしいという願いがあります。大学では実践することが困難であったため、大学院でたくさん実践をし、さらに研究を深めていきたいです。

長期インターンシップでは、2つのことを中心に学んでいきたいです。1つ目は発問の仕方についてです。教育実習では、事前に発問をある程度考えていました。しかし、それに精一杯で児童の発言に対して学びを深めるような返しができずに悩みました。発問によって授業の流れや学習の深まりに差がでてくると思います。それぞれの質問で児童がどのような反応をしているのか、そして教員はどう返しているのか、授業を観察して学びたいです。発問についての技能をつけるには、もっと実践して自分の授業に自信をつけていくことが必要です。インターンシップでの経験が無駄にしないように授業計画と振り返りをし、それを次につなげていこうと思います。

2つ目は児童との関わり方についてです。教育実習で授業中以外の時間も児童と関わってきました。しかし、教員としてではなく、一緒に話して遊んでくれてたまに授業をするお姉さんというイメージが強かったのではないかと思います。教員に近い立ち位置から遠い存在であったと反省しています。教員になる前に、インターンシップで直していきたいです。

4月の印象や休み時間などの距離感は授業中の児童の態度にもでてくると思います。児童に寄り添うことは一番ではありますが、寄り添いすぎると教員に対して慣れが生じてしまいます。児童に注意をしても聞いてくれなかったり、授業も真面目に受け取れなかったり、教員と児童の関係が悪くなってしまうようにしたいです。インターンシップで、教員が児童とどのように関わっているのかと、お姉さん感を無くすにはどう変わったら良いのかを学んでいきます。

大学院では様々な人との関わるができると感じます。児童、大学生、大学院生、教員、それぞれと関わる中で足りない知識・技能を増やしていこうと思います。教員として教壇に立てるほどの技能はまだないと思うので、たくさんの人と話し合い高め合いながら、私の教員としての在り方を見つけていきたいです。福井県で教員になりたいから大学院でさらに学ぶことを選択したので、どの場でも学びの姿勢を忘れずに過ごしていきます。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

櫻井 翼 (さくらい つばさ)

はじめまして。今年度より、福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コースに入学した櫻井翼です。出身地は岐阜県で、昨年度までは岐阜聖徳学園大学に所属し、中学校・高校の一種教員免許状(英語)を取得しました。大学院に進学するにあたって、岐阜拠点と福井拠点のそれぞれの教職員の方々とご相談して、自身の学び・研究をより深く実践的なものにしていきたいという願いから、福井拠点に進学することを決めました。

大学時代は、教師としての資質能力や教科専門性等の向上を目指していくと同時に、「視覚」をテーマ

に様々な取り組みや研究を行ってきました。具体的な取り組みとしては、学生へのサポートや大学構内の視覚的環境整備を行ってきました。私は視覚障がいがあり、これまで通ってきた学校や専門機関等から支援を受けながら、学習をしてきました。大学では、こうした経験を活かして、支援する立場にも立ち、大学内の学生支援センターとの協力を図りながら、取り組んできました。「支援」における両立場での経験は、自身の学びをつくるうえでの土台になっています。

視覚をテーマにした研究では、卒業研究を中心として、今日におけるデジタル化教育に伴う児童生徒の視覚的配慮について研究してきました。今日の教育現場において、ICT 機器を用いた教育のデジタル化が急速に進んでいる一方で、児童生徒の視覚的問題が悪化している現状に着目し、先行研究や文献等を参考にしながら、研究を進めていきました。この研究を通じて、教育のデジタル化がもたらす教育効果の最大化と、視覚的配慮による児童生徒への視覚的負担の最小化の両立を目指しています。しかし、これまでの研究の中では、実践面での検討や、研究の余地がある部分など、多くの課題があります。そこで、大学院での学びを通じて、自身の研究をより実践的で深いものにしていきたいと考えています。

今後の展望として、長期インターンシップを中心とする実践から得られる学びを大切にしていきたいと考えています。実践からの学びは、自分自身が具体的な視点を持って、どのようにその実践の意味や価値を見出していくかによって、得られるものが大きく変わると思います。自分自身の学びや成長に向けて、主体的に動いていきたいです。

そのために、まずは福井の土地や教育に慣れたいと思います。私自身、これまで岐阜の土地や教育で育ってきて、岐阜の教育について学んできました。大学院に進学することが決まり、初めて福井の土地に触れたとき、岐阜との違いに戸惑うことが多くありました。それは、教育の面でも同じことだと思います。

まず、岐阜と福井での教育の違いに注目しながら、福井での教育について、観察や勉強を進めていきます。

次に、具体的な視点を持ち、学びを深めていきます。具体的な視点を持つことが大切であると理解しているものの、簡単なことではないと思っています。時に、視点が曖昧になったり、苦勞したりすることもあると思います。しかし、その時は逆に学びを深めるチャンスだと思います。大学院では、多くの視点や教育観をもった学生、教職員方などと対話する機会が多く設けられています。こうした機会を有効に活用して、自分にはなかった視点や学びを吸収して、自分自身を見つめなおし、成長へとつなげていきたいです。

最後に、私のこれまでの研究テーマである「視覚」をここでも大切にしていきたいと思っています。専門教科である英語科の授業に、視覚的配慮を組み合わせたユニバーサル・デザインの実現、学校環境の改善など、実践的な視点で様々なことに挑戦していきたいです。これは、自分自身がもつ一つの個性だと思います。この個性をさらに伸ばして、様々な場面で発揮したり、個性を通じたメッセージを伝えたりしていきます。

大学院での学びに関して、大きな期待を持っていると同時に、少なからず不安もあります。一刻も早く福井に慣れて、ここでの時間を無駄にせず、過ごしていきたいと思います。これからよろしく願いいたします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属特別支援学校

笹本 穰太郎 (ささもと じょうたろう)

はじめまして。今年度から連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学することになりました。笹本穰太郎です。昨年度 3 月までは、日本

体育大学体育学部体育コースに所属していました。取得免許は、中学校一種（保健体育）、高等学校一種

(保健体育)、特別支援学校一種(知・肢・病弱)です。

日本体育大学では大きく分けて二つのことを学びました。一つ目は、保健体育教育です。保健体育科目は一般的には主要な教科ではなく、学校受験が行われる科目でもありません。しかし、保健体育科目は、現代の変化が激しい社会において「生きる力」を育むことができる科目であり、学校における保健科目では、健康に関する価値や知識を理解し、自ら課題を見つけて主体的に考え、課題を解決する資質や能力を育成する必要があることを学びました。体育の授業では、球技の指導で、どうすればパスがつながるかなどを生徒に問題を提示し、考えさせ、判断させるといったアクションを取り入れるなどの実践力を学んできました。

二つ目は、特別支援教育です。特別支援教育は、教育の原点とも呼ばれており、高度な知識・授業実力・生徒とのコミュニケーション能力が必要とされることを学びました。さらには障害スポーツの歴史や指導方法など、実際に身体を動かしながら学んでいきました。

本教職大学院は、特別支援教育について学び直したいという強い思いを胸に入学を決めました。きっかけとしては、学部4年次の特別支援学校の教育実習です。それまでは自分自身、保健体育の教師を目指していて、どこか特別支援の免許を余りとして、取りに行く気持ちがありました。そんな心境で実習が始まってみると、自身が指導した授業で生徒は泣き始めたり、砂をかけられたり、授業が思うように進まなかったりと、挫折を経験しました。この経験がとても悔しく、なぜ生徒はこのような態度をとったのか、自分はどうか対応すればよかったのかなど、特別支援教育の指導方法や生徒の気持ちについて考えるようになりました。それから実習に対して本気で向き合う

ようになり、先生方の授業を見学させていただく中で、一つ一つの授業の裏には、先生方の準備と工夫が詰まっていることに気づきました。また、特別支援教育における教職員の情報共有や生徒一人一人に適した授業展開の奥深さを知ることができました。実際に、試行錯誤しながら工夫した部分について、生徒が応えてくれたり、授業が円滑に進められたりなどを観察することができました。そして最終日の授業指導で生徒一人一人に適した授業内容や、MTとSTの動きの打ち合わせを行ったところ、生徒が生き生きと授業に取り組み、率先して何かに取り組む姿勢が見受けられ、生徒の真剣な顔、楽しそうな顔を見たときに、特別支援学校の教師としてのやりがいや楽しさに気づくことができました。実習を終えて、生徒一人一人をもっと成長させてあげたい、明るく元気に生活ができる手助けがしたいといった思いが芽生えてきました。また、一年を通じた先生方や生徒との、コミュニケーションを取りながら、楽しくて成長につながる授業作りをしたい、先生方の授業をもっと見学し、自分の授業に取り入れていきたいなどの実践力を鍛えたいと思い本校を選びました。

長期インターンシップでは、拠点校の先生方や大学院の教職員の力をお借りしながらも、実践と省察から再度、実践を繰り返すことによって自らの授業力を高めていき、子どもに寄り添える授業を形にできるように努めていきたいと思っています。また、学校現場の一員として加わることに自覚を持ちながら、周りの先生方と積極的にコミュニケーションを図ることで、学校や地域とのつながりの中で教員としての総合力を高めていきたいと思っています。まだ、至らないところが多くあると思いますが、2年間で成長できるように精一杯頑張っていきますので、どうかよろしくお願いします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市安居中学校

柴田 和輝（しばた かずき）

はじめまして。今年度から福井大学教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、柴田和輝と申します。昨年度まで、福井大学教育学部中等教育コース、人文社会教育サブコース（社会科専攻）に所属していました。取得免許は中学校一種（社会）、高等学校一種（地理歴史）、高等学校一種（公民）です。趣味はスポーツをすることです。特にバスケットが好きで、月に何回か社会人のバスケットサークルに参加し、汗を流しています。

私は高校時代に日本史を教わった先生に憧れを抱いて、社会科の教員を目指すようになりました。その先生は自分が訪れた遺跡や観光地を写真で見せてくださり、私は社会科の授業に興味・関心を持って受けることができました。授業で様々な工夫をされていたのが印象的でした。

以上の経緯もあり、教育学部では社会科を専攻しました。印象に残っているのは、「社会科教育法」の授業です。知識伝達型の授業しか知らなかった私にとって、「問い」を子どもが考えていく社会科の授業は衝撃的でした。この授業を受けたことで、社会科の授業観が大きく変わりました。卒業論文は「主体性を引き出す社会科授業の学習課題の研究」というテーマで研究しました。本研究では、社会科の授業において、どのような「学習課題」を設定すれば生徒の主体性を引き出すことができるのか考察し、最後に授業プランを開発しました。これまでに述べた卒業研究や学部での授業から社会科教育について多くの知見を得ることができました。

大学時代に取り組んだ探求ネットワークの活動では、障害のある子どもたちと2年間にわたって関わりました。私は自閉症スペクトラム症の子どもと関わる機会が多くあったので、自閉症スペクトラム症の特性や支援の在り方について学ぶことができました。次に、ライフパートナーの活動では、不登校になっている児童に対して支援を行いました。初めはそ

の子がなかなか心を開いてくれず、悩んでいました。しかし、粘り強く関わり、信頼関係を築いていく中で、少しずつ子どもと打ち解けることができました。自分が関わる中で児童に変化が見られたときは、非常に嬉しかった覚えがあります。焦らずに子どもと粘り強く関わり、信頼関係を築くことの大切さを学びました。

教育実習は福井大学附属義務教育学校で行いました。指導教員の先生から「考える社会科の授業」を実践することで、子どもに「考える力」や「生きる力」を育成することができると学びました。どのような授業を目指すべきなのか疑問に思っていた自分にとって、理想とする社会科の授業の姿を明確にできたのは大きな収穫となりました。教育実習を通して、自分の社会科の授業観が大きく変わったと感じます。この経験から、自分が現場に出てからも「考える社会科の授業」を行っていきたいです。

しかし、このまま学校現場に出ることに不安がありました。というのも、私は1度目の教育実習で精神的に苦しくなり、リタイアした経験があるからです。自分自身、本当に教師になるのか悩んでいるというのが本音です。そこで、教職大学院への進学を決意しました。教職大学院では、長期インターンシップがカリキュラムの中心となります。1年間にわたって学校に入り、教師の仕事について学ぶことができます。その中で、自分が教師としてやっていけるのか考えていこうと思います。また、社会科の授業力を高めることも意識していきたいです。2年間で教員としての専門性や実践力を少しでも高めたいと思います。そして、ラウンドテーブルや月間カンファレンスでは、現職の先生方とお話しさせていただき、教職のやりがいや実践での苦悩などについて学んでいきたいです。

最後になりますが、教職大学院の先生方、インターンシップ先の先生方、大学院の先輩方、同期の皆さん、

これからお世話になります。特に、大学院の先生方やインターン先の先生方にはご迷惑をおかけすること

もあるかと思いますが、どうぞよろしくお願い致します。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立丸岡高等学校

杉本 彩綺 (すぎもと さき)

はじめまして。福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コースに入学しました杉本彩綺です。よろしくお願いします。昨年度までは、福井大学工学部物質・生命化学科に所属しており、工学部で高等学校一種(理科)を取得しました。私は、石川県出身で小学校3年生から中学校3年生までバドミントンをしていました。高校時代は、勉学に集中するため帰宅部でしたがバドミントンの楽しさがどうしても忘れられず、大学でバドミントン部に入部し、現在もバドミントンを続けています。

私は、保育園の頃から将来の夢に「学校の先生」と書くほど小さな頃から学校の先生に憧れていました。実際に小学校・中学校・高校と過ごすなかで多くの先生方と関わり、より一層教員になりたいと思うようになりました。小学校から理科の授業が得意で、様々な現象について調べたり、昆虫や植物を自分なりに育て、観察したりすることが好きだったので理科の先生になりたいと思っていました。高校理科の教員になることを決めた時に、専門性やバックグラウンドが必要だと感じ、物理・化学・生物を専門教科として学ぶことができ、かつ教員免許を取得できる福井大学物質・生命化学科に入学しました。工学部で教員免許を取得するには、卒業必修単位に加え教員免許取得の単位がさらに10から20単位ほどが必要となるため学部時代はとても忙しかったです。大学の教育実習で授業を行ったときや、大学卒業時に教員免許状をもらったときなどは大変な中でも夢に近づいたと実感でき、本当に嬉しかったです。その一方で、教員免許取得の必修教科を履修し実習を行うなかで、

自身の教師としての実力不足を実感しました。実習では自分に知識があってもうまく伝えることができなかったり、知識のみの授業で生徒の興味関心を引くような授業にできなかったりと多くの反省点があり、それらを改善する機会がないことが悔しく、今まで当たり前の様に受けてきた授業の一つ一つに先生方の工夫、努力が詰め込まれていたことに気づきました。また、教育について考える授業を受講した際に、資料を読み多くの人と意見交流することでさらに教育に関して深く考えたいと思うようになり、教職大学院に進学することを考えました。

私は教員になった時に生徒と多く対話し、一人一人に合ったサポートをしていきたいと考えています。教員視点では、問題がないように思える生徒でも悩みや相談したいことがあり、それらを生徒が気軽に話せるような教員でありたいと思います。そのため、大学院では、インターン先のクラスの一人一人をよく見て、対話していきたいと思います。一人でも多くの生徒が少しでも学校や勉強が好きになる様に話を聞き、問題の解決策などを一緒に考えて行きたいです。そのほかにも大学院でやりたいことが多くあります。新しくなった学習指導要領をさらに深く読み込み、院生の皆さんや現職の先生方と意見交流しインターンで実践することや、インターンで多くの生徒と関わることで学ぶこと、工学部での知識・経験や多くの授業経験からより良い授業を作ること、学校現場でしか経験することのできないクラスの作り方や校務分掌など多くのことを考え、経験し、学びたいと考えています。すべてを学びきることは難しい

と思いますが、自分らしく食欲に多くのことを吸収し、学んでいきたいと思います。また、実際に学校現場に行くことで気づくことや疑問などもあると思います。一つ一つ考え、先生方と話し合うことで学んでいきたいです。

大学院生活を通して、少しでも憧れた教員のようにになれるよう、また私らしい教育スタイルを見つけられるようにしっかり学んでいきたいと思います。2年間どうぞよろしくお願いします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市明新小学校

滝波 もも加 (たきなみ ももか)

はじめまして。今年度より福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コースに入学いたします滝波もも加と申します。昨年度までは、関西学院大学理工学部環境応用化学科に所属していました。現在、中学校一種（理科）、高等学校一種（理科）の教員免許を取得しています。今年度から教員免許プログラムを受け、小学校一種の免許を取得する予定です。

私は6歳の頃から13年間バレーボールを続けていました。福井工業大学附属福井中学校・高等学校に所属し、その6年間は毎日練習に励みました。高校では、日本一を目標に掲げ親元を離れ寮生活をし、自立することの大切さ、家族への感謝の気持ちなどたくさんの学びを得ることが出来ました。この経験からバレーボールの技術面だけでなく、人として大切な人間力というものを身に着けることができました。道にゴミが落ちていたら拾う、周りの方々への感謝の気持ちを忘れないなど、当たり前のことを当たり前にする事の大切さを学び、私自身とても貴重な体験をさせていただくことが出来ました。特に高校の部活の先生からバレーボールを通して人間力など様々なことを学ばせていただき、この経験をきっかけに教師への道に興味を持つようになりました。

大学は、中・高校と理科の面白さを教えてくださった先生方との出会いをきっかけに理工学部に進学し、毎日実験に励みながら化学の面白さを実感することが出来ました。光る錯体の合成を主に研究していたこともあり、少しの衝撃や温度変化で様々な色に錯

体に変化する現象を目の前で体感し、理科の面白さを改めて実感することが出来ました。理科に苦手意識があった私にとってこの経験はとても大きく、何かきっかけがあれば人の心は動かすことが出来ることを改めて実感できました。

「バレーボールを通して学んだことを他の子どもたちにも伝えたい」、「理科嫌いな人に少しでも理科を面白いと感じてほしい」、このような気持ちが今までの経験を通して強くなっていき、自分の中で理想の教師像が膨らんでいきました。このような思いから「良い教師とはなにか」深く考えていくようになり、今までお世話になった先生方のことを思い返した時、「生徒の可能性を引き出す教育の大切さ」と「学び続ける大切さ」に気付きました。多様性が強調される時代のなかで、子どもたち一人一人の個性を引き出し、可能性を広げること、またどの立場であっても現職の教師の方々、先輩方、そして子どもたちなど様々な方から学びを得る姿勢が大切だと感じました。そのような可能性を引き出す教育法について深く学びたいと強く思うようになりました。理工学部に進学したこともあり、大学在学時に教育についてあまり研究できなかったので、福井大学の教職大学院に進学することを決めました。

教職大学院では、授業研究やインターンシップ、カンファレンスなど様々な活動を通して、引き出す教育について学んでいきたいです。特に ICT に関する授業研究に力を入れ、私自身時代に対応できる能力を身に付けながら生徒の可能性を引き出す教育につ

いて考えていきたいです。教科の専門性に特化した大学での学びとは異なり、教育学部では教育法に重点を置いた学びが得られるのでとても楽しみです。また、カンファレンスでは現職の先生方や先輩からの意見を参考にさせていただきながら、教育法について幅広く学び、自分の視野を広げていけるよう努

めていきたいです。これまでたくさんの経験をさせていただいた時に支援してくださった家族・先生方・友人などたくさんの方々への感謝の想いを私自身教壇に立った時に子どもたちに繋げていけるよう、この3年間学び続ける姿勢で努力していきます。これから3年間よろしく願いいたします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市中藤小学校

伊達 あさひ (だて あさひ)

はじめまして。この度、福井大学連合教職大学院授業開発・教職専門性開発コースに入学しました伊達あさひです。昨年度までは仁愛大学子ども教育学科に所属しており、取得免許は幼稚園一種、小学校一種です。大学では幼児教育や、幼児の発達段階、幼稚園、保育園と小学校の連携についてなどを学んできました。

私はより多くの子どもが理解のできる授業づくりをしたいと思ったのが、教員になろうと思ったきっかけです。私は小学校の頃から勉強をすることが苦手でした。途中から勉強についていけなくなり、自分はどこが分からないのかも分からないといったことが今までにありました。私の周りには勉強ができるクラスメイトが多くおり、グループワークをする際に自分の意見を言えなかったり、発表をする際に間違っていたらどうしようと怖くなり、発表ができなくなったりなど、授業を受ける姿勢が消極的になっていました。私のように授業についていけなくなったり、発表をする際に答えや自分の意見を書くことができていないのに手を挙げなかったりする子どもを小学校実習で見かけることがありました。そのような子どもは授業に追いつけない時点で勉強そのものが苦手であったり、他の人が答えてくれるから自分は答えなくてもいいなど授業にあまり関心が無かったりする印象を受けました。私自身勉強が

苦手であったため、勉強に追いつけない子どもに寄り添ったり、子どもの意見を聞きだしたりすることのできる授業が行えると考えています。私は勉強に対する苦手意識を持つような子どもが一人でも出ないような授業づくりを行いたいと思っています。そのためには、基礎基本を子どもが身に付けることができる授業づくりをしたいと考えています。例えば、日常生活に触れたり、子どもが興味を持っているものに関連させたりしながら基礎基本を学習するなどのことです。

私は子どもの興味・関心をそのまま授業に繋げることができる授業をしたいため、長期インターンシップではその点を学びたいです。このことについて学びたい理由として、私が小学校実習で外国語活動の研究授業をした際に学習内容に興味関心を示さなかった子どもや、興味関心を持ったが学習内容や学習項目の基礎基本的な理解にまで至らなかった子どもがいたことから「学習内容に対する児童の興味関心を高め、そこから学習内容の基礎基本につなげる手立て」が大切であると痛感したからです。

前文でも述べましたが、私自身勉強が苦手であったため、自分が子どもの立場に立った時、どういう授業を受けていたら勉強が楽しくなるのかを基に、授業づくりをしたいと考えています。自分が授業を受けて勉強に対しての意識がプラスになるような授業

づくりが行えると子どもたちの授業に対しての意識も変わってくると思うので、大学院や配属校で学んでいきたいと思っています。大学院での2年間の自分の行動として、相手を待つのではなく、自分から学

びに行く姿勢を忘れずにこれから頑張りたいと思います。また、授業づくりも大事ですが、まずは子どもとの信頼関係を築くことを第一に頑張っていきたいと思います。これから2年間よろしくお願いします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

中谷 夏菜 (なかや かな)

はじめまして。今年度より福井大学連合教職大学院授業開発・教職専門性開発コースに入学しました、中谷夏菜と申します。昨年度までは、福井大学教育学部中等教育コース所属していました。取得免許は、小学校一種、中学校一種(音楽)、高等学校一種(音楽)、特別支援学校一種です。

大学では、音楽について学び、声楽を専攻していました。幼少期からピアノを習い、中学校では合唱部に入部し、高校では合唱部に加えオーケストラ部にも所属し、チェロを演奏していました。様々な音楽に興味があり、大学入学後は、多くの授業の中で幅広い音楽に触れたことで、より学びたい、表現したいと思うようになりました。一方で、良い表現のためには技術を身に付ける必要があることにも気が付きました。そのことから、正しい発声法を学ぶことで、聴衆に伝わる表現をしたいと思い、声楽を専攻しました。

大学で専門的に声楽を学ぶ中で、正しい発声法は言語化することが難しく、学校教育の中で、子どもに正しい発声法をどのように教えていくのかを考えるようになりました。子どもがのびのびと自身の理想の表現をするためには、ある程度の技術を身に付けることが必須です。そのために、教師として、自分の学んできたことを子どもにどのように伝えていくかが重要になります。私は、これまで学んできた声楽の技術を向上させながら、整理し、子どもの発達段階や身体の成長に合わせた正しい発声を、正しく教えて

いけるようにこれからも学び続けていきたいと思っています。

学部生時代には、特別支援教育についても学びました。特支を学ぶきっかけは、小学校時代の同級生です。特別な支援が必要だった同級生がいたにもかかわらず、小学生の時は何も理解できず力になれなかったことが心残りで、支援が必要な子どもに対して、正しい支援が出来るようになりたいと思うようになりました。私は特別支援の知識や考え方を持つことで、通常学級に在籍する配慮が必要な子ども一人ひとりに合わせた適切な支援をしていきたいと考えています。

私は、福井大学の取り組みである探求ネットワークにも3年間参加しました。そこでは、組織を動かす立場となり、今思い返してみると、こうすればよかったという後悔も多いですが、たくさんのことを学びました。特に、周りの人の意見をまとめ、集約し、調整し、組織を引っ張っていくことがとても難しく、頭を悩ませることも多かったです。しかし、そのような経験があったからこそ、様々なところに目を向け、多角的に考えることができるようになったと感じます。そして、探究的な取り組みに参加することで、自分自身だけではなく、子どもや他の学生の成長を見ることができ、その成長に対して、自分与える影響が大きいものであるということも自覚できました。学校現場における教員という立場は、子ども、他の教員、保護者、地域の人など、多方面に影響を与えるため、

やりがいがあると同時に大きな責任があるものであると感じるようになりました。そんな教員になることに對してまだまだ不安はありますが、その不安が小さくなり自信を持って教壇に立てるよう大学院で学んでいきたいと思っています。

大学院では、これまでの学びをより深めていくとともに、インターンシップを通して実践を行いなが

ら、教師としてのスキルアップを目指していきます。大学院で理論を学び、インターンシップで実践を学び、それについて現職の先生方や大学院の先生方と語り合う中で、自分の視野を広げていきたいと思っています。子どもたちが豊かな人生を歩めるよう、教師としてどのようにアプローチしていけるのかをよく考え、充実した2年間にしていきたいと思っています。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市明新小学校

永合 祐貴 (なごう ゆうき)

はじめまして。今年度より福井大学連合教職大教職専門性開発コースに入学しました永合祐貴と申します。昨年度までは福井大学工学部電気電子情報工学科電気通信システム工学コースに所属しておりました。今現在教員免許は取得しておらず、免許プログラムによる3年間を経て小学校一種の免許を取得する予定です。

私は父が教員であったこともあり、小さいころから教員を目指していました。しかし、高校で理科と数学が好きだったこともあり、工学部を志望することになりました。福井大学工学部に入学し、勉強する一方で友達に紹介してもらったこともあり小学校の児童クラブでアルバイトを始めました。そこで、子供たちと過ごすうちに子供たちと一緒にいる楽しさや、勉強を教え理解してもらえる喜びを知り、もう一度教師を目指したいと思い教職大学院に進学しました。

児童クラブで子供たちと接するうちに興味を持ったことが2つあります。1つ目は、教師の教え方によって子供の理解度が変わることです。児童クラブでは宿題をする時間があります。答えがわからない生徒には教師が教えるのですが、私の教え方では生徒がわからないことが度々ありました。そこで児童クラブの先生方に教えることを頼むと、とたんにわからなかった生徒たちがわかるようになるのです。

そこで、先生方が生徒の学年や経験を考慮し、その生徒にとって一番わかりやすいであろう方法で教えているのに気づき、私は教師の教え方の重要性を改めて感じました。また、わかりやすい教え方とはどのようなものかということに興味を持ちました。2つ目はプログラミングについてです。私は工学部で4年間プログラミングについても勉強してきました。現代社会ではIT化が進んでおり小学校ではプログラミング学習の必修化が開始されています。そこで児童クラブでは子供たちにプログラミングの勉強を教えようとiPadを導入していただきました。しかし、いざ教えようとしてもローマ字すら習ったことのない子供たちにどう教えていいかわからずあまりうまくいきませんでした。そこで、小学校でのプログラミング学習では何を目的に、何を教えるかを調べ、考えなおし、もう一度小学生にあったプログラミング学習を行いたいと思いました。また、プログラミング学習を行ううえで、1つ目にも上げた教え方にもこだわりたいと思いました。

これからの3年間では、工学部では受けなかった教育の授業を受けることになります。そのどれもが、私が児童クラブで興味を持った「教え方」に関する授業であり、学ぶことが楽しみです。その授業一つ一つで、児童クラブで子供たちと接してきた4年間を思

い出し勉強に励んでいきたいと思っています。また、インターンシップでは、今まで見たこともなかった教師としての目線で授業から学び、工学部で学んだプログラミングという強みを生かしつつ、教育の現場にすぐにでも入れるような実践力のある教師を目指していきたいと思っています。

教育という未知の世界に入ったばかりでまだ何もわかりませんが、たくさんのことを学び、教員としての力をつけていきたいと思っています。教職大学院の先生方、インターンシップ先の先生方、院生の皆さん、3年間よろしくお願いします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

長谷部 瑞季 (はせべ みずき)

連合教職大学院に入学しました、長谷部瑞季です。よろしくお願いします。

昨年度まで福井大学教育学部の初等教育コースに所属しており、国語を専攻していました。また、小学校免許、中学高校国語の一種免許に加え、学校図書館司書教諭の免許を取得しております。

大学時代には、国語を専攻していたため、国文学や漢文学といったさまざまな文学作品の読解および考察を行うと同時に、国語の教科書に掲載されている作品の教材研究を行い、児童生徒が主体的に取り組むことができ、またより深く教材を読み取るためには教師からどのような働きかけができるかについて、授業や実習を通して学んできました。

具体的には、ある一つの作品に向き合い、その作品に用いられている表現技法や作品の舞台といった内容面に関することから、作者の人生や他の作品のような作品を取り巻いている要素など、多くの視点から作品に向き合って読解を行いました。この点は、国語の教師に必要な力を身につけていく上で最も重要な点の一つであったと言えます。

主免実習、及び副免実習は、単元における「繋がり」を意識して授業づくりをすることを改めて意識する機会になったと思います。例えば、単元のまとめとして、次の単元の内容を意識した活動をデザインする

ことや、前回の授業で得た学びを土台とし、また次の授業の内容に向けて生徒が自ら疑問を持つことができるような声かけをすることなど、ある授業1時間のみではなく、より広い視点で単元を捉える視点を養ってきました。子どもの視点から意味のある活動を計画して、授業の繋がりを作ることは難しかったですが、教師に必要な能力を身につける上で必要不可欠な機会であったと考えています。

また、私は学校図書館司書教諭講習を受講しており、その講義を通じて現在の学校図書館が抱えている問題と実際に向き合うこととなりました。

学校図書館は、現在資料の購入費が減少しており、児童生徒の学びをサポートする事のできるような資料をより一層精選する必要があるという問題に加え、インターネットを利用した調べ学習のサポートを行うという役割が増えていることなど、児童生徒が学習に役立てることのできる環境にするために改善すべき点が多くあります。この点について、大学院での長期インターンシップを通して、実際の学校図書館や利用状況を観察し、解決するための視点を養っていききたいと思います。

また、私は学校図書館を利用した調べ学習及び教科学習との連携について、学校図書館司書教諭講習の中で、各単元ごとに1年間で最低一回学校図書館

を利用した学習を取り入れた計画を作成しました。その中で気付いたことには、学校図書館を利用した調べ学習と単元の学習の結びつきやすさは、教科によって大きく差があるということがあります。例えば、社会科や理科のように日常生活の事柄と単元の学習が結びつきやすい教科はそれに関連する資料を利用した授業を計画しやすいですが、そうではない教科については、次の単元との繋がりや、他の教科との関連性を意識した学習の計画をする必要があると強く思いました。

このように、単元を取り巻く要素を意識した、教科学習と学校図書館を利用した調べ学習のデザインについては、私が教職大学院で探究していきたいことの一つです。

また、私は卒業研究で行った日本語の研究についても、教職大学院でさらに深く追求していきたいと考えております。

私は卒業研究で、「平安和歌の感情表現」をテーマにし、古今和歌集を資料として和歌の中に用いられている感情形容詞を抽出してその傾向について探りました。感情形容詞の傾向を見ていると、これまで私の知らなかった多くのテーマの和歌に触れることになり、その中に詠まれた感情には、現代に生きる私た

ちが共感できると考えられるものも多く存在しました。

この研究を通じて考えさせられたこととして、国語科の学習と、児童生徒の身の回りにある身近な事象を結びつけることがあります。教育実習で授業づくりをする際に私が苦心した点の一つとして、単元の導入を工夫し、生徒に興味・関心を持ってもらうためにはどうすればよいかがあげられます。今回の和歌の研究を通して、国語科において単元と児童生徒の興味・関心を結びつけるためには、単元で取り扱われる教材のテーマや作者の伝えたいことの中心と児童生徒が共感できるような事柄を関連させる事が必要なのではないかと考えさせられました。

このような点について教職大学院でより深め、またインターンシップを通して現在の教育の現場が抱えている問題や、国語科における課題について、長期間の変化を意識しながら捉え、解決する方策を深く検討していき、また他の教科のメンバーの視点や、先輩方がこれまで現場を見てきた経験を取り入れながら多角的に考えていけたらよいと考えております。

教職大学院での2年間を実りあるものにしていこうと思います。教職大学院の先生方、インターンシップの配属校の先生方、先輩方、同期のメンバーの皆様、これからよろしくお願い致します。

授業研究・教職専門性開発コース1年/岐阜聖徳学園大学附属小学校

松河 圭亮 (まつかわ けいすけ)

皆さん、はじめまして。今年度より福井大学連合教職院の授業研究・教職開発研究コースに入学した松河圭亮です。

出身地は愛知県豊橋市ですが、昨年度までは、岐阜聖徳学園大学の教育学部、理科専修に所属しておりました。所有している免許は小学校教諭1種免許、

中学校教諭1種免許、高等学校教諭1種免許です。また、司書教諭の資格も持ち合わせております。趣味はテレビ視聴、コーヒーを入れること、温泉巡りで、特技はジャグリングやバルーンアート等の基礎的な大道芸ができます。

大学で所属していた初等理科教育ゼミでは、「1 単位時間内で学級全員がコイルモーターを回せること」を目標に、3D プリンターを用いた教具開発をする研究を行っておりました。コイルモーター製作はエナメル線を上手に巻き、コイルの中心が直線上にならないと上手に回りません。そこで、コイルを作るための教具「コイル型」を制作して実践授業を行いました。この研究を進める過程において、小学の理科教育ならではの子どもたちが躓くポイントが何なのかを考えて、教師がその困難を取り除くために工夫を凝らす大切さを学ぶことができました。

また、遊 science という子どもたちに理科の面白さを広めるため、科学実験ボランティアを行うサークルにも所属しておりました。私は基本的に何をするのか企画する立場にいました。スライム作りやマーブルクレヨン等様々な企画をしました。中でもガウス加速器(鉄球が磁石の引き寄せる力によって加速される実験)の実験では、より子どもが楽しめるようにジャンプ台等の様々なレールを用意して、実験当日たくさん子どもたちに喜んでもらえました。この経験から、どんなことでもより楽しく学べるよう工夫を凝らすことの大切さを学ぶことができました。

教職大学院に進学した理由は、教師としての自信をつけるためです。私は、愛知県で教員採用試験を受けて 2 次試験で不合格と判定されました。このまま講師になり、また来年採用試験頑張ろうと考えていた頃、サークルでお世話になっていた教授からこの教職大学院を薦められました。大学院は私の中で全く考えていなかった道であり、興味が出て詳しく調べてみると、長期インターンやカンファレンス等とても魅力的な取り組みに興味をもちました。このまま講師として働いても、不合格と判断された私ではきつとうまくやっていけないだろうと思い、教職大学院で勉強して、自分に自信をつけたいと考え、教職大学院に進学することを決意しました。

教職大学院での 2 年間では、教師としての力をつけるべく、長期インターン先の学校で先生方がどのように行動しているのかをよく観察し、疑問があればしっかりと尋ねて、自分自身もどう行動するのか考えを深めていきたいです。また、長期インターンで学んだことを週間カンファレンス等で共有することで学びを広げていきたいです。教職大学院での学びを充実させていくために、しっかりと目標を定め、何事にも本気で取り組んでいきたいと思っています。皆さん、2 年間よろしくお願いします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立科学技術高等学校

松田 美穂子 (まつだ みほこ)

はじめまして。今年度より授業研究・教職専門性開発コースに入学いたしました松田美穂子と申します。昨年度までは、福井大学教育学部中等教育コースに所属し、中学技術を専攻しておりました。取得免許は、小学校 1 種、中学校 1 種(技術、家庭)、高等学校 1 種(工業、家庭)です。

私は、ものづくりの楽しさを伝えたいと考え、教員を目指しました。幼い頃からものづくりが大好きで、

粘土で可愛いお菓子を作ったり、木材でミニチュアを作ったり、常に何かを作っているような子どもでした。小学校、中学校、高等学校での授業や活動の中で、ものづくりの楽しさや達成感を味わい、それを多くの人に伝えていきたいと感じました。ものづくりに関する仕事には、職人系、製造系、建築系等、様々な種類があります。しかし、教員は一つのものづくりに縛られず、多くのものづくりを、多くの人に伝える

ことができる職業であると同時に、想いを伝え、一緒に考えることができる唯一の職業であると感じました。

大学で印象に残っていることは、模擬授業と卒業研究です。模擬授業では、大学生を中学生に見立てて、発言や考えを想定しながら、授業のシミュレーションをします。初めは、授業の流れを記載した学習指導案に沿って進めるだけだと甘い考えを持っていました。しかし、自身で何度も考えなおしたり、先生や同級生と検討したりする中で、生徒が楽しく感じ、学びのある授業作りの難しさや、生徒を惹きつける話の間、安全面に関する配慮等、1つの授業に対して様々なことを考える必要があると実感し、授業づくりの奥深さを知りました。

卒業研究では、つまずき、諦めてしまう生徒に着目した研究を行いました。教師になった際、クラスに、つまずいて諦めてしまう生徒は、少なからずいると思います。その時、教師として、どのような働きかけを行うことで多くの生徒が諦めずに課題に取り組んでくれるのか、研究を通して明らかにしたいと考えました。その課題の解決に向けて研究を進めて、研究の難しさを実感するとともに、自分で研究の計画を

立て、学び、継続的に取り組む力を身に付けることができたと感じています。

大学院では、高等学校でのインターンシップを中心に知識・技能の向上を図りたいと考えています。インターンシップにおいて、特に意識をして学びたいことに学級経営があります。大学では、専門の教科に力を入れており、学級経営に関して積極的に学ぶ機会が非常に少なかったと感じています。高等学校における学級経営は、生徒同士が協働する時間が少ない分、教師の働きかけが重要になると考えています。この2年間、現場の先生方の学級経営から学び、インターンシップの報告会であるカンファレンス等で様々な先生方から助言をいただきながら、学級経営に関する知識を深め、視野を広げていきたいと考えています。

インターン配属校の先生方や、教職大学院の先生方には沢山ご迷惑をおかけすることがあると思いますが、多くの知識を吸収しながら、真摯に取り組んでいきたいと思います。また、教師になることを見据えて、勉学に励み、有意義な時間にしたいと思います。これから2年間どうぞよろしくお願いいたします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属特別支援学校

村上 瑠菜 (むらかみ るな)

はじめまして。今年度より福井大学連合教職大学院の授業研究・教職開発専門性コースに入学しました村上瑠菜です。昨年度までは福井大学教育学部初等教育コース特別支援教育サブコースに所属し、特別支援教育を専門に学んできました。さらに社会科も学んできました。取得免許は小学校1種、特別支援学校1種(知的・病弱・肢体不自由)、中学校1種(社会)、高等学校1種(地歴)、高等学校1種(公民)です。

学部時代では、地域の子どもたちと係わる探求ネットワークで、障害のある子どもと係わるFFC(ふれあいフレンドクラブ)に所属し、初めてじっくりと障害のある子どもと係わっていきました。

また特別支援学校に行き、教材研究や教育実習を行いました。教育実習では、活動の見通しを持たせることの大切さを学びました。私が担当した遊びと制作の授業の中で、「まつりをしよう」ということに取り組みました。制作ではまずどんなことをするのか

メインティーチャーがお手本として、一連の流れをすべて見せたり、途中まで見せたり、あそびではゲームの内容やルールをしっかりと把握することが大切であることが分かりました。教師側が何度もやっているからという勝手な判断でデモンストレーションをしない、的あてでは、どんな時に得点が入るのか、ルールを一方的に伝えると子どもたちは、実施する際、何をしたらいいかわからない状態でした。さらに、他の子が実施しているときは友達の姿を見ることなく、違うところをみて、一緒に活動を作り上げていく姿はなかったです。その反省を生かし、最後の授業では一緒にルールをみんなで確認すると、他の子が実施しているときも様子を見て、一緒に楽しんでいる姿が見受けられました。このように、子どもにとっての活動の見通しをどのように作っていくのか、どういったことが見通しにつながるのか、子どもと係わっていく中で見つけていくことが子どもにとっての活動の見通しにつながるということが分かりました。

さらに、卒業研究においては、他者との係わりに慎重な子どもとのやりとりの拡大を目指した実践研究を行ってきました。ここでは、私は子どもの自成信号を読み取り、そこから子どもの思いを推測し、それを踏まえた係わり方を考えながら係わっていました。他者との係わり、コミュニケーションに慎重な子どもとの係わり合いにおいては、子どもに安心してもらうこと、そしてやりとりをすることの楽しさを感じてもらうことが重要です。言語的な表出が限られていたとしても、私が子どもの自成信号を読み取ることで、子どもの思いを推測することもできます。

また、私は私の考えていることを言語化して係わっていました。言語化せずに黙ったままでは、相手が何を考えているのかがわかりません。このことは子どもにしてみれば、何を考えているのか分からない

相手と係わっていくことには不安があると考えたためです。

そして、私は活動を重ねていくうちに、子どもの思いをより表出してほしいなと考えました。表出が生まれる状況は、子どもの興味のあるモノから活動を拓げていきたいなと考えました。そこで私は子どもの興味・関心を探っていきました。子どもの目につきやすい場所にさりげなく置いておき、子どもが手に取るかどうかを観察しました。ここから子ども自身の興味・関心を読み取り、子どもは興味のあるモノを介して他者とのやりとりの楽しさも味わうことができ、そのことが子どもの思いの表出をさらに促すのではないかと考えました。

さらに私は活動を通して子どもの世界に付き合っていました。このことは、子どもの世界を否定しないこと、その世界を受け止めることだと考えました。子どもが係わり手の前で自分を出せるようにしていくためには、子どもが共有しようとしてくれていること、子どもの世界を活動の中に取り入れていくことが大事です。

大学院では、長期インターンシップに行き、子どもと係わっていきながら、子どもに合った支援や、授業作りを学んでいきたいです。大学で学んできたことを生かしながら、よりじっくりと個別的な支援を行いたいです。インターンシップでは、長いスパンで子どもと係わることができるため、そこで見えてきた子どもの姿を記録し、カンファレンスにおいて、メンバーに共有し、そのことを基に、意味づけを行っていきます。一人だけでなく、様々な人のお話を聞きながら、私自身の支援に生かし、子どもたちと係わっていききたいです。また、気になったことをすぐに先生方にお聞きし、インターンシップ先の先生方にはご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立高志高等学校

村橋 達也 (むらはし たつや)

この度、福井大学大学院連合教職開発研究科に入学した、村橋達也です。これまで、福井工業高等専門学校電子情報工学科に5年間、同専攻科生産システム工学専攻に2年間、それぞれ所属しながら、学士（情報工学）の学位を取得しました。今年度より、この教職大学院の授業研究・教職専門性開発コース（4系/教育職員免許取得プログラム）に所属しながら、中学校一種（数学）と高等学校一種（数学）の免許状及び教職修士（専門職）の学位取得を目指しますので、よろしくお願い致します。

私は、高校・大学生の7年間で工学の世界で過ごしてきたため、この教職大学院のことは勿論、教育学に関しては右も左もわからない新人です。「免許状ってどうやって取得するの?」「一種と二種と専修…何それ?」「単位振替できないの?」「先生って何…?」な状態です。また、高専という独自のコミュニティに所属していたため、これから免許状の取得を目指す高等学校との様々な違いに戸惑いました。例えば、科目名（数IAなどとは呼ばず、基礎解析A,Bや応用数学といった福井高専独自の名称がありました）やカリキュラム、1年生からはじまる90分の授業時間といった生活面から、研究者が講義する高専独自の空気感や雰囲気といった授業面までの様々な側面において、「あたりまえ」があたりまえじゃなかったのだと思い知らされました。ついでに言ってしまうと、この大学院に入学した今、「免プロとは?」「系を選んでねって言われても…。」「いきなりインターンに行ったら大丈夫なのかなあ?」「金カンって何をするの?」なんて気持ちを抱えているのが正直なところです。

このような、不安だらけな教育の世界に飛び込むと考えたきっかけは、「個別教育支援」ということを知ったことでした。私は、高専在籍時に研究活動の一環で、教師や指導者に向けた学習支援システムとして児童生徒の個人特性に適した教育方法を提案するツールの開発に取り組みしました。とつてもざつ

くり説明すると、情報工学の力で教師が持つ不安や悩みを解消することをコンセプトにした研究です。この活動の中で、「障害のある児童生徒の一人一人のニーズを正確に把握し、教育の視点から適切に対応していくという考えの下、長期的な視点で乳幼児期から学校卒業後までを通じて一貫して的確な教育的支援を行うこと」を目的とした個別教育支援と呼ばれる取り組みを知りました。そのとき、7年間という長期にわたる高専での学びと照らし合わせたことで、その重要さを痛感しました。

この気持ちを抱えながら、教育学に関しては右も左もわからない新人な私にできることは何だろうか?と、ある新任教員と何気なく会話していたら、「私の母校においでよ! 皆さん喜ぶと思いますよ!」と言われました。それが、この教職大学院でした。この一言をきっかけに、翌週には、長期インターンシップの様子や数学科の教科会議を見学したり、教職大学院のある先生と悩みや進学後の活動等を洗いざらい話したりする機会を設けていただきました。お陰様で、7年間過ごした情報工学から不安だらけな教育の世界に飛び込む決心がつきました。また、教職大学院へと進学するにあたって必要な書類や手続きについて、偶然にも福井大学と高専に所縁のある両校の事務職員の方々がかなり手厚くサポートしてくださったお陰で、現実的な環境が整いました（後の話では、福井高専から教職大学院への進学例が無く、かなり苦労したとのことでした。本当に有難うございました）。そして、今では「不安を知っている」ことを堂々と自信にしています。

私は非常に流されやすい性格で、良いと言われたら大抵のことは信じてきました。実際、良かったことばかりです。また、これまでの他人との出会いにも恵まれていると思っています。たまたまバスの隣席に座っていた方に、余ったから、と映画の無料招待券を頂いたこともありました。このような性格と運の良

さを大切にしながら、3年間の大学院生生活で得られる学びを省察し、次に生かせるような取り組みによってその学びを深めていきます。併せて、子どもたちと一緒に自分自身も学びを広げながら、同じ院生

や教師の方々と試行錯誤の過程を一緒に経験していることを願っています。右も左もわからない新人なりに前を向いて精一杯頑張っていきますので、よろしくお願い致します。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

山本 晃永 (やまもと あきひさ)

初めまして。今年度より授業研究・教職専門性開発コースに入学いたします山本晃永と申します。昨年度までは、福井大学教育学部学校教育課程初等教育コース小学校教育サブコースに所属し、専門教科として音楽を専攻しておりました。取得免許は、小学校一種、中学校一種（音楽）、高等学校一種（音楽）です。

私は幼い頃から歌うことが大好きで、中学2年生から本格的に声楽を学び始め、これまで様々なコンクールやコンサートを経験してきました。大学に入学するまでは教師になるつもりは全くなく、「声楽で生きていきたい」とばかり考えていました。しかし、将来に不安を感じてしまった私は、声楽で生きて行く道を諦めざるをえませんでした。しかし音楽には携わっていたという強い思いから、音楽の楽しさを次の世代の若者に伝えていきたいと思うようになり、教師を目指すことにしました。

大学時代でももちろん声楽を専攻しました。そして体が楽器であるからこそ毎日少しずつ変わっていく音に改めて魅力を感じ、本当の自分の声を探求するために、一から発声を見直し、毎日自分の声と向き

合いました。多くの作品に触れ合ってきましたが、3年次から始めたドイツリート的美しさに惚れ、大好きなオペラアリアと並行してドイツリートを学び、歌う歌詞にもっと自分の思いをのせることができるようにドイツ語をはじめとした言語の勉強も始めました。毎日声楽と向き合う中で、歌こそ自分を表現することができる最高の手段なのではないかと思うようになり、子どもたちにも歌うことを通して表現することの楽しさや、大切さを伝えていきたいです。

さらに大学院では音楽をより専門的に学ぶ他、ICTにも力を入れて研究を行っていきたくと思っています。特に現在の音楽の授業においては、ICT機器がただ出来上がったものをアウトプットするだけの道具になってしまっていると感じ、より良いICT機器の活用方法、アプリの開発等に力を入れていきたいと思っています。そしてインターンシップを通し、子どもたちを見取る力や、ファシリテート力など、これからの教師に求められる能力を身につけていきたいと思っています。これから2年間どうぞよろしくお願いいたします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

劉 靖宇 (りゅう せいう)

初めまして、今年4月から福井大学連合教職大学院に入学しました劉靖宇と申します。所属は授業研究・教職専門性開発コースの授業研究専門性開発アプローチ(4系)になります。昨年度までは大阪大谷大学教育学部学校教育専攻に所属し、小学校1種の教員免許を取得しました。

出身は中国です。私が日本に留学するきっかけは、生まれてからの詰め込み授業に対して疑問があったことが関係しています。ある先生は日本に留学した経験があり、私に「教育に関することに興味を持っているなら、一度日本に留学したら、どうか?」と声をかけてくれました。

7年前(2016年)に日本に留学することになりました。学部時代では、論理的な知識を大学で学んでいましたが、実践的に学校はどうやって運営しているのか、先生たちはどうやって学級経営や生徒指導を進めているのかについて、教育実習の一か月間では見ることができず、まだまだ分からないことが多いと感じましたので、教職大学院に進学することを決めました。

私はこれからこの教職大学院での長期インターンシップにおいて、教育現場のより多くのことを見学し、学級経営・生徒理解・授業づくりまたは学校運営などのことを学んでいこうと思います。

また、自分の言語力・説明力は足りないと思いますので、ICT機械を使いながら、自分の弱みを補足できるかどうかを検討したいです。また、教育実習では特に中学年の算数では新しいことや変なカタチの面積を求めることは少し難しいことに気づきましたので、子どもの学習意欲が下がらないよう、授業づくりの工夫などを学んでいきたいと思っています。

大学院でのインターンシップ・カンファレンスなど、様々な場所で先生たちと院生たちと教授たちと様々なコミュニケーションをとって、協力することで、自分の能力を培いたいです。迷惑をかけることも多く申し訳ないですが、将来の自分はきっと自信をもって、良い授業を作って、良い教育環境を作ることができると思います。

新しい環境で正直まだ慣れていないので、不安ですが、皆さんの力を借りながら、私も頑張りますので、この2年間よろしくお願いします。

授業研究・教職専門性開発コース1年/岐阜聖徳学園大学附属中学校

和藤 隼生 (わとう しゅんき)

授業研究・教職開発専門性コース所属の和藤隼生です。出身は愛知県で、出身大学は岐阜聖徳学園大学教育学部理科専修です。

「わとう」という名字はあまり聞きなれないかと思っています。全国でも500人ほどしかない稀な名字で

す。この名字が故に、生じる問題もたくさんあります。まず、前提として名前を読んでもらえないので自分が何者であるか認知してもらうことができません。電話口で名前を伝えるときはもちろんのこと、ファミレスの受付表にカタカナで「ワトウ」と書いても、

なぜだかカトウさんやクドウさんと読み間違えられるなんてことは日常茶飯事です。おまけに、ワトウですから「ワタナベ」さんや「ワダ」さんなど、一般的に名簿順が後ろになる方たちよりもさらに後ろになるため、生まれてこの方名簿順で一番後ろしか経験したことのない人間です。名簿番号が奇数や素数になると名簿順でペアを作るときには必然的に余りになったり、プリントの配布が終わっていないのに配布物の説明が始まったり、そもそも配布物が足りずにまわりに見せてもらってと先生に言われたり。名簿順が一番後ろというだけで、何かと不便を感じてきました。もちろん、名簿が一番前の方には一番前なりの苦労があったかと思います。そんな名簿が一番後ろだからこそ感じたことをふまえ、名簿が一番前の子も含め、身長順、学力順などが差別にあたるのではと叫ばれている昨今、名簿順という不可抗力による不平等がうまれない学級経営を行うことが目標であり、他の先生にもぜひ行ってもらいたいと密かに願っています。そんな私の名字でもあります、私は人と被りにくい特別感からこの名字に愛着がわいて好きですし、和藤という名字に誇りをもっています。

そんな私、和藤ですが、大学院に進学した背景にはかなりの葛藤がありました。約1年前、腰椎椎間板ヘルニアという腰の病気を患い、日常生活さえ正常に送ることができなくなりました。もちろん教壇に

立つことなど不可能でした。それから、地道にリハビリを続け、ある程度日常生活を送れるほどには回復したものの、教員という職の激務をこなすためにはまだ治療を続ける必要があるという判断でした。そこで、選択肢として挙げたのがこの教職大学院でした。自身のキャリアを止めることなく、さらなる自分自身のスキルアップができる教職大学院は現状をふまえたうえで最善の選択肢であると考え、進学しました。

長期インターンシップでは、健康面に十分気を付けながら、体力強化に努めるとともに、失敗を恐れず、自ら積極的に行動していきたいです。大学3年生時に行った教育実習では担当教員に怒られないためにはどうすればよいかということばかりを考えて行動、その場を乗り越えるために必死でもがいた日々で、教師の働き方の実態や教材研究など教師の本質を学べたとは言い難い教育実習を過ごしてしまい、後悔とともに教壇に立つことに漠然とした不安を抱えていました。この漠然とした不安の原因は何か、自分に不足していることは何か、それを明確にし、解決していくためにも積極的に行動し、学ぶ姿勢を大切にしていって、胸を張って教壇に立つための有益な2年間にしたいです。

自ら選んだ教職大学院という選択肢。後悔のないようにひたむきに前進していきます。



開講式

2023 年 4 月 2 日（日）午前、今年度の福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科（以下、教職大学院）の開講式が行われました。

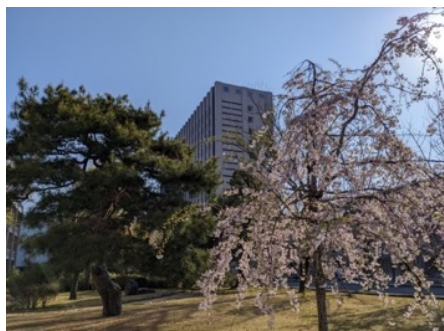
昨年に引き続き、対面とオンラインを併用した開催となりましたが、東京サテライト、岐阜聖徳学園大学の院生・スタッフが対面で参加するなど、和やかさの中にも活気のある開講式となりました。

今年度から教職大学院の研究科長が柳沢先生から木村先生へとバトンが渡り、新たな体制になりました。また、新入学生は、授業研究・教職専門性開発コースが 22 名、ミドルリーダー養成コースが 14 名、

学校改革マネジメントコースが 30 名の計 66 名を迎えることになりました。

開講式では、冒頭の研究科長のあいさつ、オリエンテーションに続き、最初のグループセッションが開かれました。グループセッションでは、院生・スタッフがそれぞれの期待や不安を共有しながら、新しい年度の展望や思いについてじっくり話し合いました。

これから教職大学院の新たな 1 年が始まります。あらためて新入学の院生の皆さん、ご入学おめでとうございます。実りある大学院生活になりますよう、心よりお祈り申し上げます。また、在籍生におかれましても、この一年が更なる学びの機会になりますことを祈念しております。





令和4年度 長期実践研究報告 作成一覧

令和4年度の修了生が作成した、長期実践研究報告の一覧です。

号	氏名	タイトル 副題
授業研究・教職専門性開発コース		
510	東 哲平	多足の草鞋で歩む ～様々な立場で経験・実践し「教職」について考えた2年間の学び～
511	五十嵐 彩香	価値ある学びを支える
512	市川 海斗	英語で子どもの可能性を広げる
513	岩瀬 夢有人	教科探求と生徒指導から創り上げる「楽しい体育」
514	岩本 幸裕	障害のある子どもの思考力の育成を目指して ～子どもの「やりたい」に向かい探究することを大事にした個別学習～
515	大澤 美貴	本音に向き合う
516	川畑 優希	個に寄り添う 多様性を認め合える集団を築くために
517	窪田 真一	“聴く”の再構築 経験から生じる学びを求めて
518	河野 茅乃	「個」にこだわり続けて
519	立石 虎太郎	理想と現実を繋ぐ教師になるために
520	古田 悠人	全ての児童が「安心」できる場所にするために 自分の2年間で省察する
521	前田 光哉	腑に落ちるまで考える
522	揚原 佑	悩み続ける中で見えてきたこと 様々な「出会い」の中での学び
523	加藤 もも加	子どもに寄り添う
524	木原 万由子	成人後のアイデンティティ構築 他者からの理解と自己受容
525	高島 伊吹	リアルに目を向ける 確固たる自分を持つために

号	氏名	タイトル 副題
ミドルリーダー養成コース		
526	上里 公人	“つながり”で育つ生徒と教師、それから地域 島への想いで広がる学び
527	内村 佐保莉	対話で学び合うコミュニティをデザインする 関わり合いつながり合う教師になるために
528	大橋 夕紀	探究的な授業を基軸にした普通科改革への挑戦
529	鎌内 菜穂	「語る」ことから「語り合う」ことへ 教師としての学び方を探して
530	向阪 望	生徒と共に探究し合う学校づくり 持続可能な協働探究を目指して
531	佐々木 清文	関わり・学び・寄り添い合って 喜び合う 生命力ある子供の絶え間ない成長と 寄り添い紡ぎ合うことで ともに大きく成長するために
532	竹中 智子	体験から学び、交わり、つながり、広がる ～カリタスの教育目標「普遍的愛を持って人に尽くす人間」を目指して～
533	Virna Christine Almazan Tancio	Enhancing Engagement with Students, JTEs, and at Schools Exploring Strategies Towards Creating a Positive Learning Environment
534	原田 久実	子どもと保育者と共に協働探究を学ぶ 対話に支えられ、対話でつながったもの
535	堀井 優	私立学校の文化・伝統を生かした探求 省察し、つながり、学び続ける教師であるために
536	村上 孝有	「本質」を探す価値 ～プロセスに光をあてる～
537	山崎 優	一人ひとりが輝く学校に！ 「協働」する子どもと教師
学校改革マネジメントコース		
538	内田 祥子	保育を語り合う繋がり求めて ～遊びの中の学びを考える～
539	加藤 悟	コミュニティをつくる 持続可能な教員組織育成を目指して
540	上中 一司	福井県の理科教育の向上と、生徒支援に向けて
541	瞿曇 俊雄	教員の資質能力の向上と業務改善
542	熊崎 敦子	学び続ける教師集団 つなぐ・支える
543	五之治 多美	一人一人が生きる学校文化をめざして ～自己実現のプロセスに寄り添う～
544	下地 美和子	地域とつながり 学校をデザインする 狩俣小学校での挑戦 アイデンティティの確立を目指して
545	夢田 昌代	誰もが居心地のよい学校づくりをめざして ～対話と協働から学びを支える組織づくり～

号	氏名	タイトル 副題
学校改革マネジメントコース		
546	谷口 隆一	皆で活気と魅力のある教育集团を築いていく 生徒も教師も、主体的・協働的に学ぶことによって、各人が持っている資質・能力を伸張する
547	藤田 政貴	「まなぶ・わかる・かわる」の中に しなやかな学校・組織・コミュニティ形成のための、心のドアのたたき方
548	堀川 和宏	通うのが楽しい魅力ある学校づくり 子どもとともに作り上げる学校を目指して
549	三保谷 遼	〈研究の文化〉が薫る学校への構想 授業づくりと教師教育の協働の物語
550	五十嵐 浩介	教師としての成長プロセスを省察する 教師観と授業観の構築・転換を往還する
551	尾崎 由美	「対話」と「傾聴」、そしてつながる 栄養教諭の視点・役割を活かしてつながりをひろげる
552	兼井 智加	自己の幸せから他者の幸せへ 協働探究が教えてくれたこと
553	植田 真美世	協働的な学びの創造をめざして ～嶺南教育フォーラムに係る長期実践と省察を基軸に～
554	笈田 美香	学び合うコミュニティを築く 教員の連携・協働、子どもと教員の連携・協働、地域と子どもと教員の連携・協働
555	北村 英之	子どもとの関わりから学んだこと プロセスを大切に考える特別支援教育
556	堂下 行浩	子どもの学び合いを支える教師コミュニティ
557	豊田 泰寿	働きたい学校・学びたい学校・通わせたい学校を目指して 教務主任としての学校マネジメントとは
558	西片 善江	学び続けるコミュニティの種 幼小を通じた子ども観、学校観、行政観の転換/指導主事の立場からの探究を通して
559	前田 浩尚	実践と理論の往還 学びを学校づくりに生かす、教師教育に生かす
560	道場 康智	推進力のある学校文化の創造 激動の時代を力強く前進し続ける組織
561	吉田 英史	探究学習を核としたカリキュラムマネジメント 魅力あふれる高等学校をめざして



年間予定表

2023年度 福井大学大学院連合教職開発研究科 年間計画 配付用 (案) 2023.4.2現在											
4	1 土	開講式 10:00-12:30 オンライン会場: 福井・岐阜 オンライン: Zoom 福井・岐阜 特別支援教育ゼミ		6	1 木			8	1 火	夏期集中講座Cycle2b* 9:30-17:00 オンライン会場: 福井 オンライン: Zoom	NITSコア研修
	2 日				2 金	週間カンファレンス			2 水		NITSコア研修
	3 月				3 土				3 木		
	4 火				4 日				4 金	※それぞれが1日ずつ一方に出席	
	5 水				5 月				5 土	夏期集中講座Cycle3a* 9:30-17:00 オンライン会場: 福井・岐阜 オンライン: Zoom	社会教育 社会教育
	6 木	入学式 週間カンファレンス準備会 12:50-14:10 (授業研究・教職専門性開発コース)			6 火		4系授業		6 日		社会教育
	7 金				7 水				7 月		
	8 土				8 木				8 火	オープンキャンパス	中堅研修 第Ⅱ期
	9 日				9 金	週間カンファレンス			9 水	附属特支公開研究会	
	10 月	前期授業開始			10 土		授業予備日		10 木		
	11 火	4系授業(4系免P1年次除く) 13:00-16:45			11 日				11 金	山の日	
	12 水				12 月				12 土		
	13 木				13 火		4系授業		13 日		
	14 金	週間カンファレンス			14 水				14 月		
	15 土				15 木				15 火		
	16 日				16 金	週間カンファレンス	附属公開研究会		16 水	夏期集中講座Cycle3b* 9:30-17:00 オンライン会場: 福井・東京 オンライン: Zoom	
	17 月				17 土	シンポジウム 13:00-17:00			17 木		
	18 火	4系授業			18 日	ラウンドテーブル 9:20-14:00			18 金		
	19 水				19 月				19 土		
	20 木				20 火	4系授業			20 日	特支ゼミ9:00-16:00	
	21 金	週間カンファレンス			21 水				21 月		中堅研修 第Ⅲ期
	22 土	月間合同カンファレンスA 9:30-17:00 オンライン会場: 福井・東京・岐阜 オンライン: Zoom			22 木	週間カンファレンス			22 火		
	23 日				23 金				23 水		
	24 月				24 土				24 木		
	25 火	4系授業			25 日				25 金		
	26 水				26 月				26 土		
	27 木				27 火	4系授業			27 日		
	28 金				28 水				28 月	入試事前説明会①(オンライン)	
	29 土	月間合同カンファレンスB 9:30-17:00 オンライン会場: 福井・東京 オンライン: Zoom			29 木				29 火		
	30 日				30 金	週間カンファレンス			30 水		
5	1 月			7	1 土	月間合同カンファレンスA 9:30-14:00 オンライン会場: 福井・小浜・岐阜・東京 オンライン: Zoom 特支ゼミ15:00-17:00		9	1 金		
	2 火				2 日				2 土		
	3 水	憲法記念日			3 月				3 日		
	4 木	みどりの日			4 火	4系授業			4 月		
	5 金	こどもの日			5 水				5 火		
	6 土	週間カンファレンス			6 木				6 水		
	7 日				7 金	週間カンファレンス			7 木		
	8 月				8 土	月間合同カンファレンスB 9:30-14:00			8 金		
	9 火	4系授業			9 日				9 土		
	10 水				10 月				10 日	特支ゼミ13:00-15:00	
	11 木				11 火	4系授業			11 月		
	12 金	週間カンファレンス			12 水				12 火		
	13 土				13 木				13 水		
	14 日				14 金	週間カンファレンス			14 木		
	15 月				15 土		社会教育		15 金		
	16 火	運営協議会(オンライン)	4系授業		16 日		社会教育		16 土	夏期集中講座Cycle3C* (予備日) 9:30-17:00 オンライン会場: 福井 オンライン: Zoom	
	17 水				17 月	海の日	社会教育		17 日		
	18 木				18 火		授業予備日		18 月		
	19 金	週間カンファレンス			19 水				19 火		
	20 土	月間合同カンファレンスA 9:30-14:00 オンライン会場: 福井・東京 オンライン: Zoom 特支ゼミ15:00-17:30			20 木				20 水		
	21 日				21 金	※それぞれが1日ずつ一方に出席			21 木		
	22 月				22 土	夏期集中講座Cycle1a* 9:30-17:00 オンライン会場: 福井・東京 オンライン: Zoom	社会教育		22 金		
	23 火	4系授業			23 日				23 土	推薦入試1	
	24 水				24 月				24 日		
	25 木				25 火	夏期集中講座Cycle1b* 9:30-17:00 オンライン会場: 福井 オンライン: Zoom	社会教育 中堅研修 第Ⅰ期		25 月		
	26 金	週間カンファレンス			26 水		中堅研修 第Ⅰ期		26 火		
	27 土	月間合同カンファレンスB 9:30-14:00 オンライン会場: 福井・岐阜 オンライン: Zoom	大学祭		27 木		社会教育		27 水		
	28 日		大学祭		28 金	※それぞれが1日ずつ一方に出席			28 木		
	29 月				29 土	夏期集中講座Cycle2a* 9:30-17:00 オンライン会場: 福井・東京・富山 オンライン: Zoom	授業予備日		29 金		
	30 火	4系授業			30 日		NITSコア研修		30 土		
	31 水				31 月						

2023年度 福井大学大学院連合教職開発研究科 年間計画 配付用（案）2023.4.2現在

10	1 日			12	1 金	週間カンファレンス		2	1 木		岐阜RT
	2 月	後期授業開始			2 土				2 金	週間カンファレンス予備日	
	3 火		4系授業		3 日				3 土	第1回入試	
	4 水				4 月				4 日	長期実践研究報告会 9:30-12:30	
	5 木				5 火		4系授業		5 月		
	6 金	週間カンファレンス			6 水				6 火		
	7 土		社会教育		7 木				7 水		
	8 日		社会教育		8 金	週間カンファレンス			8 木		
	9 月	スポーツの日	社会教育		9 土		授業予備日		9 金		
	10 火		4系授業 NITSコア研修		10 日				10 土		
	11 水		NITSコア研修		11 月				11 日	建国記念の日	
	12 木		NITSコア研修		12 火		4系授業		12 月		
	13 金	週間カンファレンス			13 水				13 火		
	14 土				14 木				14 水		NITSコア研修
	15 日				15 金	週間カンファレンス			15 木		
	16 月				16 土				16 金		
	17 火		4系授業		17 日				17 土	シンポジウム 12:50-17:40	
	18 水				18 月				18 日	ラウンドテーブル 8:20-14:00	
	19 木				19 火		4系授業		19 月		
	20 金	週間カンファレンス			20 水				20 火		
	21 土	月間合同カンファレンスA 9:30-14:00			21 木				21 水		NITS研修
	22 日				22 金				22 木		
	23 月				23 土	冬期集中講座a 9:30-17:00 オンライン会場・福井・岐阜・東京 オンライン・Zoom	授業予備日		23 金	天皇誕生日	
	24 火		4系授業		24 日				24 土		
	25 水				25 月		中堅研修 第IV期		25 日	学部個別試験(前期)	
	26 木				26 火	予備日			26 月		
	27 金	週間カンファレンス			27 水				27 火		
	28 土	月間合同カンファレンスB 9:30-14:00			28 木				28 水		
	29 日				29 金				29 木		
	30 月				30 土			3	1 金		
	31 火		4系授業		31 日				2 土	第2回入試	
11	1 水			1	1 月				3 日		
	2 木				2 火				4 月		
	3 金	文化の日			3 水				5 火		
	4 土				4 木				6 水		
	5 日				5 金	冬期集中講座b 長期実践研究報告の作成 9:30-17:00 オンライン会場・福井・東京			7 木		
	6 月				6 土				8 金		
	7 火		4系授業		7 日				9 土		
	8 水				8 月	予備日 長期実践研究報告の作成			10 日		
	9 木				9 火		4系授業		11 月		
	10 金	週間カンファレンス			10 水				12 火	学部個別試験(後期)	
	11 土	推薦入試2			11 木				13 水		
	12 日				12 金	週間カンファレンス			14 木	運営協議会	
	13 月				13 土	大学入学共通テスト(予定)			15 金	インターンシップ説明会	
	14 火		4系授業		14 日	大学入学共通テスト(予定)			16 土		
	15 水				15 月				17 日		
	16 木		NITSコア研修		16 火		4系授業		18 月		
	17 金	週間カンファレンス			17 水				19 火		
	18 土	月間合同カンファレンスA 9:30-14:00			18 木				20 水	春分の日	
	19 日				19 金	週間カンファレンス			21 木		
	20 月				20 土				22 金		学位授与式
	21 火		木曜授業		21 日				23 土	学位記伝達式 18:00-20:00	
	22 水				22 月				24 日		
	23 木	勤労感謝の日			23 火		4系授業		25 月		
	24 金	週間カンファレンス			24 水				26 火		
	25 土	月間合同カンファレンスB 文京 9:30-14:00 (長期実践研究報告作成のためのガイダンス14:30-) 東京RT			25 木				27 水		
	26 日				26 金	週間カンファレンス			28 木		
	27 月				27 土				29 金		
	28 火		4系授業		28 日				30 土		
	29 水				29 月				31 日		
	30 木				30 火		4系授業 授業予備日				
					31 水	長期実践研究報告締め切り 週間カンファレンス	金曜授業				



公開研究会 等

福井大学教育学部附属幼稚園・義務教育学校 令和5年度 教育研究集会 (第1次案内)



6月16日(金)

幼稚園研究主題
「つながりが育む学びの深まり」

幼稚園研究副題
「好きが広がり、世界をひらく」

義務教育学校研究主題
「自律的な学びへのイノベーション
探究するコミュニティを培う」

義務教育学校研究副題(5年次)
「共に学ぶプロセスをデザインする」

授業公開

幼稚園での遊びや各教科の探究的な学びを公開します。
子供の学びについて共に語り合しましょう。



幼稚園の遊び



各教科の探究的な学び



シンポジウム



学習院大学 秋田 喜代美 氏



慶應義塾大学 鹿毛 雅治 氏

学習院大学教授 秋田喜代美氏、慶應義塾大学教授 鹿毛雅治氏にシンポジストとしてお越しいただきます。
詳細は、4月下旬発送予定の第2次案内にてお伝えします。

- 幼稚園・義務教育との接続に興味がある方
- 授業実践を語り合い、教育全般および専門教科の実践力を高めたい方
- プロジェクト型学習や探究的な学びに興味・関心がある方
- 近年の教育改革などの教育情勢の動向について興味・関心がある方

是非ご参加ください。

所在地

福井大学教育学部附属幼稚園

福井大学教育学部附属義務教育学校

〒910-0015

福井県福井市二の宮4丁目45番1号

TEL:0776(22)6687【幼稚園】

:0776(22)6891【前期課程】

:0776(22)6985【後期課程】

会場までのアクセスは
右記のQRコード、もしくは、
下記のURLより
接続される本校HPにて
ご確認ください。

<http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-g/>



お問い合わせ先

福井大学教育学部附属義務教育学校 担当：森川

Tel 0776-22-6985 /Fax 0776-22-6703

Email : fukuifuzokugimu@gmail.com

Schedule

- 4/22,23 Sat. Sun.** 月間カンファレンス **A** 日程、
4/29,30 Sat. Sun. 同 **B** 日程
5/24 Wed. 運営協議会(オンライン) **日程が変更されました**
5/20 Sat. 月間カンファレンス **A** 日程、
5/27 Sat. 同 **B** 日程
6/17,18 Sat. Sun. 実践研究 福井ラウンドテーブル **2023 Summer Sessions**



昨年度も多くの修了生の皆様にご協力をいただきまして、ありがとうございました。今年度も気軽に投稿いただけますと幸いです！

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【編集後記】 本号では、授業研究・専門性コースの若手の院生から真剣かつ熱い思いが共有され、また、新任スタッフからは、教育者としてのベテランの知恵に溺れず、謙虚な姿勢で学び続ける思いを頂きました。今年度は、どのような化学反応が教職大学院に生まれるのでしょうか。楽しみです。また、巻頭言では福井新聞という外側の視点から福井大学教職大学院の取り組みを位置付けてくださいました。今後、福井大学においても発信力を大切に、読み手の皆様とともに Newsletter を作っていきたいと思います。(Newsletter 担当)

教職大学院 Newsletter **No. 170**

2023. 4. 22 内報版発行

編集・発行・印刷
福井大学大学院 福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp